



TITLE:

殷周青銅器銘文鑄造法に関する若干の問題

AUTHOR(S):

林, 巳奈夫

CITATION:

林, 巳奈夫. 殷周青銅器銘文鑄造法に関する若干の問題. 東方學報 1979, 51: 1-57

ISSUE DATE:

1979-03-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/66567>

RIGHT:

殷周青銅器銘文鑄造法に關する若干の問題

林 巳奈夫

一 前 言

殷周時代の青銅器に銘文がつけられ、時に長文のものがあり、そこに書かれた内容の研究には宋時代以來の傳統があつて、青銅器研究の重要な一分野となつてゐることは改めていふまでもない。一方、銘文がどのやうな工程で青銅器につけられたかといふ問題となると、これは全く未開拓の分野に屬し、研究者が各人各様の考へを持つてゐるだけで、共通の認識など殆んどないと言つてもよいほどである。筆者はここに、差當り手許に集めた關係資料を整理して發表し、必要な考察を加へて研究者の將來の研究の足がかりを呈供する。更にこの銘文鑄造の技術的な問題に附隨して推論される、殷西周時代の青銅器銘文の書き手についても論及する。

二 從 來 の 說

殷から春秋時代末まで、中國の青銅器の銘文は極く稀な例外を除いて鑄銘である。⁽¹⁾即ち豫め鑄型に銘文を用意しておき、器と同時に銘文も鑄造によつて造り出されるのである。鑄上った器に鑿で銘文を刻むのが一番手輕な方法であるが、これは戰國



圖1 陽文の銘 約 1/1



圖2 同 約 1/1

時代以降に廣く行はれるやうになる。鑿を造るべき良質の銅がこの時分になつて漸く普及するに至つたことに由ると思はれる。

殷から春秋時代の青銅器の銘文のうち、數量も多く、また長文の重要なものを含むのは青銅器や樂器の鐘につけられたものであるが、それらは多く陰文、即ち器の表面より凹んだ線の文字で鑄造されてゐる。これらの青銅器は我々が現今みるやうに鏽でおほはれてゐたのではなく、同時代には常時ピカピカに磨いて使はれたのであるが、銘文の文字を陰文に鑄込んだについては、文字の線が器の表面から突出してゐては磨く時に邪魔になるから、といふことが重要な理由であつたに違ひない。

殷周時代の青銅器鑄造には粘土を焼いた鑄型が使はれたことはよく知られる所であるが、銘文を鑄込む場合、陽文、即ち器表から突出した線の文字であれば、この粘土製の鑄型ないし中子⁽⁴⁾に裏字（紙に書いた文字を紙の裏から透かして見た形の文字）で下書きをし、その通りに彫刻刀で彫り込むか、更に簡便には尖つた道具でぶつつけに線刻すればよいのである。圖1、2はその例で、寫眞に見る通り、尖つた道具で無造

り、頗る簡單である。そのやうな技法も同時代に用ゐられてゐて、

作に中子の土に彫り込んだ様子が見取られる。然しこのやり方が原則として觚の足の内部とか、爵の鑿の下、飾金具の裏側など、常時磨く必要のない部分ないし品物に限られてゐる事實は、銘文が陰文に鑄込まれたについての右記の推測を裏づけるものである。

ところで鑄上った文字を陰文にするためには、鑄型ないし中子に文字を陽文で表はしておかなければならないが、これはちよつと想像しただけでもわかるやうに、なかなか手間のかかることである。それも、陰文の銘の拓本を観察すると直ちに知られるやうに、鑄込まれた文字の線には筆づかひがかなり忠實に再現されてゐるのである。さういふ線を鑄型ないし中子に突線で造り出すにはどうしたらよいか。これは殷周の青銅器ないしその銘文に關心を持つ者なら、一度はあれこれと想像をめぐらせる問題であらう。

石璋如は「殷代的鑄銅工藝」⁽⁵⁾でこれについて次のやうに考へてゐる。即ち鑄造に使用する鑄型ないし中子とは別に型を用意し、そこに（裏字でなく）正字の陰文で銘文の文を彫り、この型——このやうな用途の型を今後假に「銘文用の母型」と呼ぶ——に粘土を押しつけて裏字、陽文銘を得、この粘土板を中子に嵌め込む、と。N・バーナードは陰文の銘を作る上に考へられる方法の第四としてこの方法を記し、圖3のごとくに圖解してゐる。⁽⁶⁾圖象記號とか祖先名の若干字のみを表はした字數の少ない銘の場合、この方法が使はれたことは確かであつたと見られる。銘文用の母型から採つた陽文の文字のついた粘土の小板を中子に嵌め込んだ時にできたと解しうる凸凹のあとが、銘文の四周に觀察されることはよくあることであり、更に甚だしきは、銘文用母型から採つた粘土の小板が中子にはめ込まれた時、中子の他の部分と同じ高さになつてゐなかつたといふ不實際の結果が、出来上つた器物から推測される例もあるからである（圖4-6）

他にバーナードは青銅容器の内壁に陰文の銘を鑄込む方法として、前引の第四の他に次の三つを記す。⁽⁷⁾即ち

(1) 石璋如が出土遺物の證によつて考へたやうに、⁽⁸⁾殷周時代に青銅容器を造る場合、まづ作るべき器の主要部を粘土で形造つて紋様も彫刻したものを用意し——現代の用語では「模型」と呼ばれる⁽⁹⁾——これに柔らかな粘土を押しつけて幾つかに分割

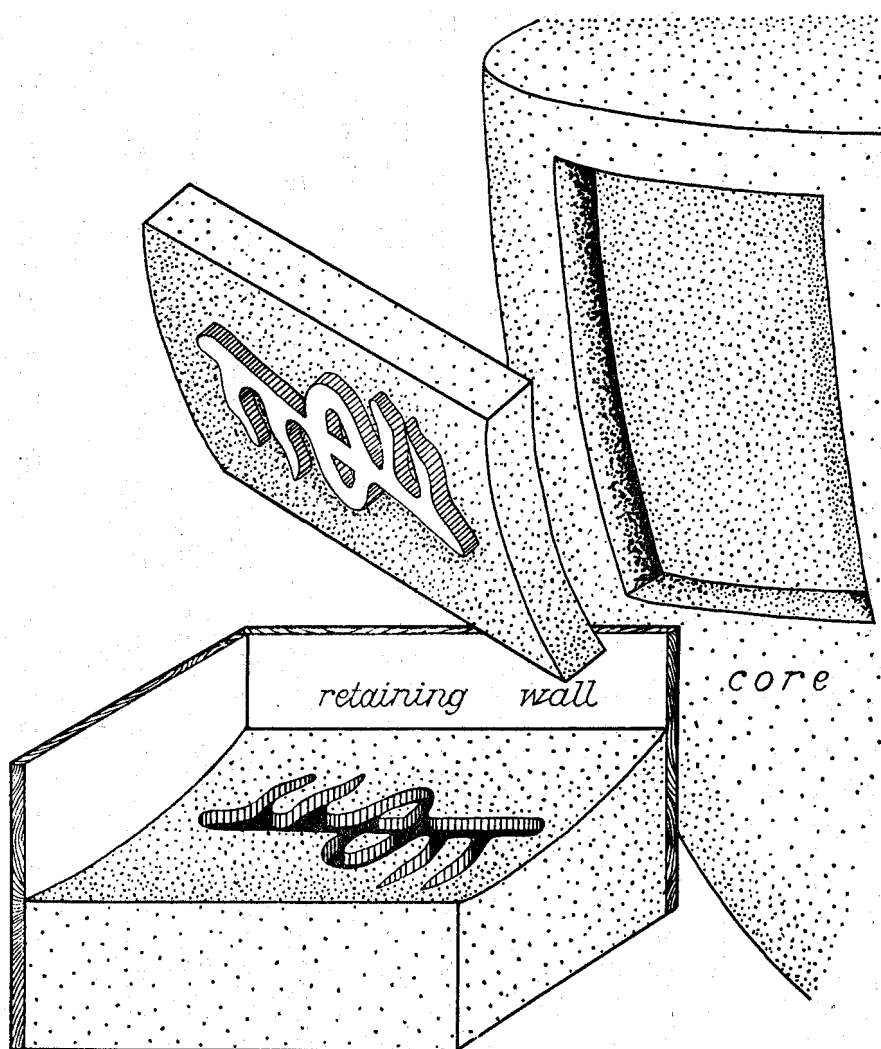


圖3 銘文用の母型 バーナード氏の圖

四

した鑄型を作る。鑄型を採った後、この模型の外側を作るべき青銅器の肉の厚さだけ一皮削り、鑄造の際の中子に使ふのであるが、削る前に銘文を入れるべき位置に筆を使って銘文を裏字で書き、文字の所だけ凸に削り残す。

(2) 阮元の記す方法であるが、どろどろに溶いた粘土を筆につけて、中子の上に直接銘文を裏字で書き、これをくり返すこと⁽¹⁰⁾によって文字の線を盛り上げる。

(3) 鑄型の、出来上った器で銘文の入るべき部分に對應する所に、出来上りの器と同じ厚さの粘土の薄板を押しあてて、乾いた所でこれを焼き、これに筆で銘文を書いて字の所を陰刻す

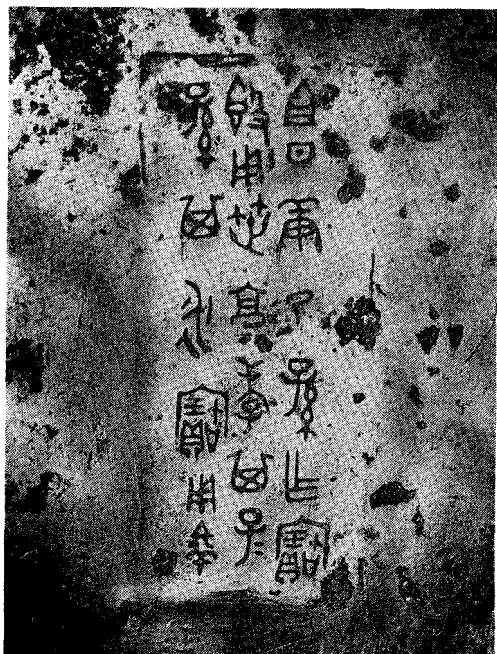


圖4 銘文用の母型のあと 3/5



圖5 同 1/1



圖6 同

る。次に分割して採つてある鑄型を再び結合し、さきの銘文を刻した粘土板を鑄型のもの位置に置き、鑄型全體に粘土をつめ込んで中子にする粘土塊を作る。鑄型と銘文を刻した粘土の薄板をとり除くと中子の外面には銘文が裏字、陽文で出てゐる。この中子の銘文以外の部分は、作るべき青銅器の肉の厚さだけ削る、と。

以上のうち、(3)は机上の空論で實用には向くまい。殷周青銅器は武器類を別にと通常厚さ一・五乃至三ミリ内外のもので、そのやうな薄い粘土板に文字を彫つて鑄型のものとの部分に當てて中子の粘土をつめ込むといふのだが、この粘土の板は極めて薄い上に乾燥、焼成の過程で必然的に歪んだり縮んだりしてゐるから、もとの鑄型にはなじまず、中子の粘土をつめる過程で破損しないことはまづ有りえないからである。

(2)の方法も恐らく使はれなかつたと思はれる。この方法では實際の遺物に觀察される、筆づかひのよく再現された銘文の溝に對應する陽文を中子や鑄型に盛り上げることが困難と考へられるからである。

(1)に近い方法は張光遠が考へてゐる。張氏は模型を一片削つて中子とするに當り、銘文をつけるべき部分を銘文の深さだけの高さに粘土を削り残し、その上に銘を筆で裏字で書いて、字の部分を陽文に彫り残すと考へる。⁽¹⁰⁾これについては近く同氏の論考が發表されると思ふので、その方法についての論評はそれから後のことにしたい。

なほ右に引いた以外にも、例へば宗婦の諸器⁽¹¹⁾にあるやうに一字づつの文字を陰刻したスタンプを使ふ方法、また曾姬無卣壺⁽¹²⁾の銘に觀察されるやうに、一行の中の四字ないし四字以内の數の文字をまとめて陰刻したスタンプを使ふ方法も知られてゐるが、それらは現在例も少くなく、問題が多岐にわたるのでここでは觸れない。^(12a)

さて青銅器に銘文を陰文で鑄込む方法としては、最初に引いた石璋如の記す方法が最も考へ易い方法である。そして字數の少ない銘文についてはその方法が確かに使はれた證據があることは前記の通りであり、その傍證としては更に補論(四八―五〇頁)に引いたやうな例も見出されるのである。ところで銘文が長く、従つてその銘文のつけられる面が相當程度彎曲してゐる時には、この方法では困難な問題が生ずる。即ち、陽文、裏字の銘のついた粘土板を採るための銘文用の母型に必要な彎曲

を與へておくのか。その場合どのやうにしてこれを作るか。またさうでなく、銘文用の母型の銘文のつけられる面を平面にしらへておくのであれば、陽文銘の突出した粘土板をかなり柔らかい状態のまま豫め作られた中子の凸みに押し當て、その彎曲した面に沿はせなければならぬ。例へば簋の底のやうに彎曲の度合ひが少なければこれも可能である。然し銘文が長く、その占める面積が大で、例へば鼎の側壁から底にかかるやうな場合となると、この方法は技術的に頗る困難となつて來よう。このやうな場合には、大きな粘土の平たい板を、中子に穿った凹みの底面の彎曲に沿ふやうに歪みを與へ、更にその底面に密着するやうに押しつけなければならぬが、この作業は表面にある陽文の文字に手をふれて押しつぶしたりしないやうに注意して行はなければならないのである。

バーナードは⁽¹³⁾四行五字詰の銘文を平たい銘文用の母型に陰刻し、それに押し當てて得た陽文の文字のついた粘土の薄板を鼎の中子の、器の底に當る部分に嵌め込む實驗の結果を報告してゐる。銘文を移した粘土の薄板の部分が、乾燥し焼かれた場合、目に見える程度に收縮した所に問題が起つた、と記してゐる。銘文用の母型から採つた柔らかい粘土板を嵌め込む時の、中子の乾き具合にも關係があらうが、この粘土板が小さい時には或る程度で済むとしても、粘土板がもっと大きい場合には、確かにこの收縮率の違ひによる隙の増大——これは中子から粘土板がはがれることを結果する——が大きな問題となるに違ひない。ところで西周時代の青銅器の内壁に鑄込まれた銘文には陰文の銘が陽文の野の中に表はされてゐるものがあり、問題は更に複雑になる。出來上つた青銅器において野が陽文だといふことは、銘文用の母型が使はれたとすると、そこにおいても野は陽文で引かれてゐたと考へなければならぬ理窟である。すると、この陽文の野はどのやうにして銘文用の母型に準備されたかの問題も解く必要がある。

バーナードは⁽¹⁴⁾毛公鼎銘——銘文の文字の間にかすかに陽文の野が認められる——の銘の鑄型の作り方について次のやうに推側した。即ち、野は最初未だ何も字を記していない粘土板の上に陰刻されたに違ひない。この粘土板に柔らかい粘土を押しつけ、もう一枚の粘土板が作られた。この第二の粘土板では、野を陰刻した粘土板に押しつけて作られたため、野は陽文である。こ

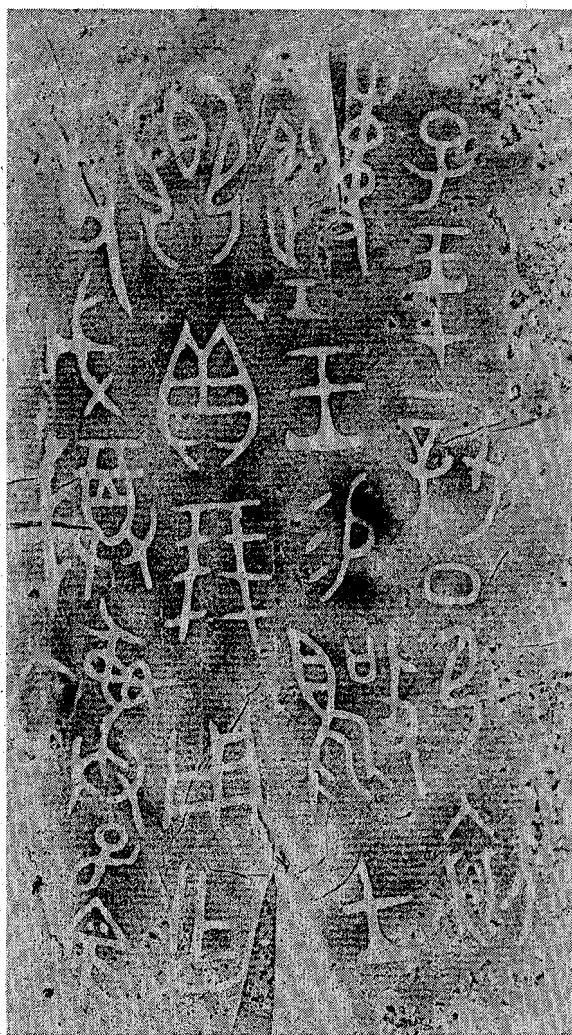


圖7 母型に陰刻した野の残る例 1/1

板——野は陰、文字は陽——は中子に嵌め込まれ、鑄造準備は終了する。鑄造された青銅器には野は陽に、文字は陰に出る、と。

この方法では、野がなぜ最初粘土の板に陰刻されたかの説明がつかない。文字の並びを正すためなら、銘文を筆で書く段階で筆でこれを引いたらよいのであり、また筆で引いた野では銘文を筆で下書きするのに邪魔だといふなら、尖った道具で軽く陰刻したらよいのである。後者の方法が使はれた証拠は稀ではあるが、例へば越前守の第三行「朋用」の両側に残る細い陰刻線に見出される(圖7)。いづれにしても野が陽文で用意されなければならない必然性はない。

また陽文の野などは、そこに筆で文字を書き、刀でこれを彫り込むのに邪魔にこそなれ、何の益にもならないからである。第一、そもそも手間をかけて陰文の銘を鑄造するについては、陽文の銘が器の内壁から突出してゐては、鑄造後の器の内壁の

の第二の、陽文の野のついた粘土板に、銘文は恐らく筆で書かれ、この銘の文字はU字形の断面の溝で陰刻された。陽文の野はしばしば陰刻の文字によって切られたことであらう。銘文全體が彫れると、この粘土板は銘文用の母型¹⁶として使はれ、その上に第三のやはらかい粘土の薄板(1/4乃至1/2インチの厚さ)が平均にしつかりと押しつけられ、銘がこれにうつされる。この銘のうつされた第三の薄



圖8 陽文の野の削られた例

仕上げや、使用の都度の磨き上げに邪魔になるからだったのである。それ程高く突出してゐないにしても、陰文の銘に陽文の野を作るなど、矛盾した仕業である。事實例へば圖8に引いた大師小子師望壺では、器の内壁に仕上げのために目の粗い鑢のやうな道具が當てられた結果、陽文の野はあらかた磨り去られ、一部分が突出するだけである。⁽¹⁷⁾ 即ち、陽文の野は銘文鑄造の工程上の必要によつて鑄出されたもので、鑄上った後は表面の仕上げによつて消し去られても一向かまはぬものだったのであり、わざわざ何らかの美觀ないし體裁の必要上鑄出されたものでは決してないのである。



圖9 歪 ん だ 野 3/4



圖10

同 3/4

更に考へてみるに、バーナードの考へるやうに、平らないしはそれに近い粘土板に長文の銘文を彫り、それに柔らかい粘土の薄板を押しつけて銘が陽文で突出してゐる粘土の板を採つたとすると、これをどのやうに扱つて極度に彎曲した中子の面に貼りつけるといふのであらうか。この柔らかい粘土の薄板の銘文のある範圍は、文字や野をつぶさないために、殆んど手をふれることもできないのである。その上、このやうな方法を想定する限り、鼎の銘文の下部に時折觀察される野の歪み(圖9、10)は説明できない。

バーナード氏は一九七六年發表の論文¹⁰⁾で考へを改め、野は平たい粘土板の上でなく、最初中子に刻されたものでなければならぬとした。これは小克鼎など、鼎の側壁から底にかかる銘文の野を注意して觀察すれば當然すぐに氣付くはずのことである。この陰刻の線は、銘文をどの位置に、どの範圍に納めるべきかを誤らないために中子に引かれるものなのである。バーナード氏はしかし、中子に野を陰刻し、それに柔らかい粘土の板を押し當て、野が陽文でうつたところととり外し、平らに伸す、といふ工程を想像してゐる。また協力者の何世昆の試みた實驗をみて、とり外してすぐの状態で、鼎の器側から底にかけての彎曲をもつた粘土の薄板を平らに伸せば、その時にひび割れが入ることに氣付いた。そこでバーナード氏はかう考へた。即ち、このひび割れをうまく野に沿つて入るやうにし、これを乾かす。そしてこれ以下は前回の論文と同じ考へで、これに銘文を陰刻、更に柔らかい粘土の薄い板をこれに押し當てて陽文銘のついた粘土板を得る。これを中子に豫め彫り窪めておいた穴にはめれば、もとのひび割れ——といふ所をみると、この陽文銘をうつした粘土の薄板には、銘文を陰刻した始めの粘土板のひび割れと同形に割れ目を切つておくといふわけであらうか——は正確にもと通りに合はさる、と。

この場合でも前回の方法の場合と同じ技術的困難が想像されよう。即ち、陽文の銘と陰文の野のために、殆んど手を觸れることのできない柔らかな粘土板を、彎曲した中子の面にうまく嵌めこんでこれに密着させるといふ作業である。また始めに中子から野を移し取つた粘土を平らに伸すといふのであるから、切れ目を入れてゐるとはいへ、この伸した粘土板には既に部分部分によつて不均等な歪みが生じてゐるはずである。これから陽文の銘を移し取つたこれと同形の粘土板が、再びもとの中子

にびたりと納まるなどといふことは、まづあり得ないことと考へるべきである。所が、遺物を観察すると、野には別に柔らかい粘土をあれこれいぢつて歪みを與へ、だましまし中子の窪みに嵌めこんだ場合に生じるであらう、不規則な曲りのやうなものは全く見出されず、最初に中子に引かれた時にさうであつたと想像されるごとく、どれも誠にスカツとしてゐるのである。¹⁹⁾これはどうしたことであらうか。

三 遺物の觀察から推論される長文の銘の鑄造法

右の銘文の野の觀察によつて理論的に推論されることは次のことである。即ち、彎曲した廣い面に鑄込まれた銘文は平ら乃至それに近い形において書かれ、彫られた銘文用の母型から中子の彎曲した面に移されたといふやうなものでなく、中子と同じ曲りを持った銘文用の母型に書かれ、彫られたのでなければならぬ、といふことである。そしてこのことを裏づける證據も別に存在するのである。

その一つは令方彝の銘である。圖11はその拓本であるが、この銘文は圖12の寫眞に見るやうに、行の上下の一字乃至一字半が器の側壁にかかつてゐる。側壁と底の境界は拓本にも幾分白いめの帶の形で認められよう。ところで、圖11の拓本を見て氣がつくことは、行の下に當る、手前の側壁にかかつた文字が、左にゆくに従つて頭を右に傾けてゐることである。このやうな現象は、例へば誰でも始め考へるやうに、平らな粘土板に文字を陰刻して銘文用の母型を作り、それに柔らかな粘土を押し當てて採つた長方形平板狀の粘土を中子に當て、銘の上下の端を折り曲げる、といふやうな工程が採られたとしたら説明が困難であらう。この現象は、鑄上つた青銅器の内面と同様、前方の側壁と手前の側壁が底から立ち上つた、断面コ字形の面に銘文が下書きされたからこそ、書きにくい手前の側壁の文字がゆがんだ、としか考へ様がない。

この銘文拓本をみると、第一行の一番下の「明」字の左上と、最後の行の最上の「明」字の右下に夫々、「」形のトンボが



圖11 側壁にかかった文字の傾く銘文 3/4

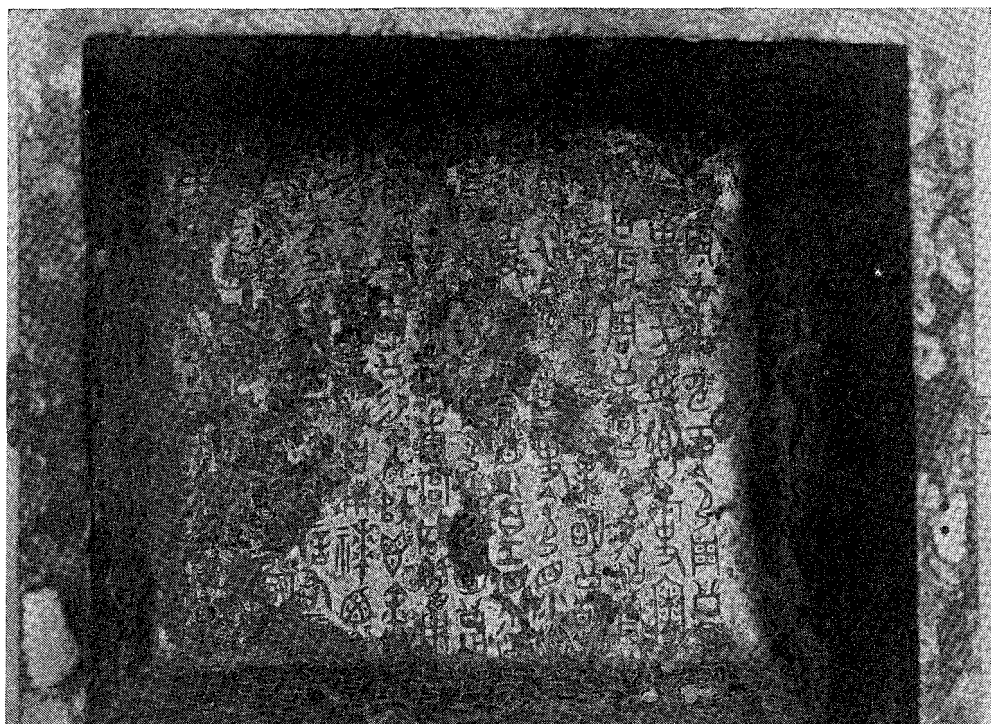


圖12 側壁にかかった文字の傾く銘文

陽文でつけられてゐる（右上と左下にはこの印は見出されない⁽²⁰⁾）。現物の器でいふと底から側壁にかかったすぐ上の所に當る。なぜ銘の外側から一行中に入った内側によつて銘文の書き手は側壁と底の境界の位置を確認してゐるはずである。もしこの銘文の鑄型が第一の方法で作られたとしたら、母型から採られた後、直角に近い角度で折り曲げられ、ひび割れなどの生ずる可能性のある部分に文字がかかるやうなことは避けたと思はれるが、その點については何の配慮もなされてゐない。これは筆者の考へた第二の方法で銘文の型が作られたことの傍證と考へられよう。

當研究所の江村君の注意された所であるが、右と同様な現象は師遽方彝にも認められる。圖13はその器銘の拓本である。器内に仕切りが入つてをり、⁽²¹⁾行の上下三字づつが側壁にかかつてゐるのであるが、仕切りの右の前方及び手前の側壁にかかつてゐる文字は頭を右に傾け氣味であり、仕切りの左の前方の側壁にかかった文字は頭を左に傾け氣味である（この側の手前の側壁の文字は傷ん

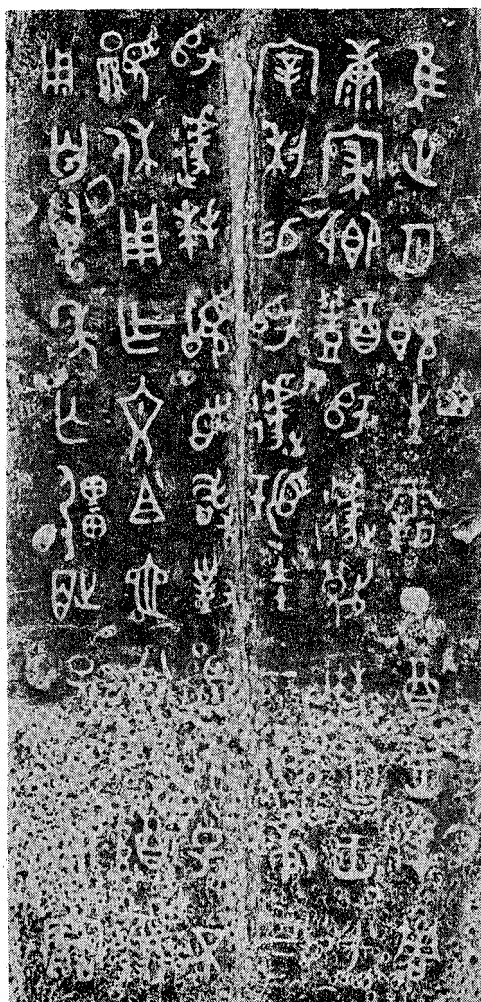


圖13 側壁にかかった文字の傾く銘文 3/4

であるが、見える限りそのやうな傾きは見られない（に對し、仕切りの左右とも器底の文字は眞直である。これも現物の器と同様、底に對して側壁が立ち上った書きにくい條件のもとに、これらの文字が記されたことを證するものである。

長文の銘で、右の方彘と同様、銘の部分だけの型を銘文用の母型から採って中子に嵌めこんだのではなく、銘文の部分をも含めた中子全體を母型から一度に作ったことを證する例は、また黒川古文化研究所藏の酎攸从鼎に見出される。この鼎の銘文のある部分の周圍には、圖14の寫眞に見るやうに、大きな範圍にわたる中子の粘土の合せ目の殘存である線がのこつてゐる。通常このやうな由來の線は銘文の外側に、銘文とかなり接近して存在するものであるが（圖6）、この例ではその範圍が特に廣い點特異である。また特に珍らしいのは、その下部兩側に下に向つて尖る、垂下した部分がついてゐることである。この突出した部分についてバーナード氏は、ここが外側の足の接合する部分と實際には合致してゐるといふが、圖15に明かなやうに、足の接合部はもっと上方、銘文のある部分の下部に對應する部分に當つてをり、それは正確でない。またそもそも足の接合は器の外側、即ち鑄型に關はることであり、銘文は器の内側、即ち中子に關はることと、兩者の間には特に關係がないはずである。

さてこの銘文の周圍をとり圍む線をみて第一に言へることは次のことである。即ち、バーナード氏が考へたやうに中子に一

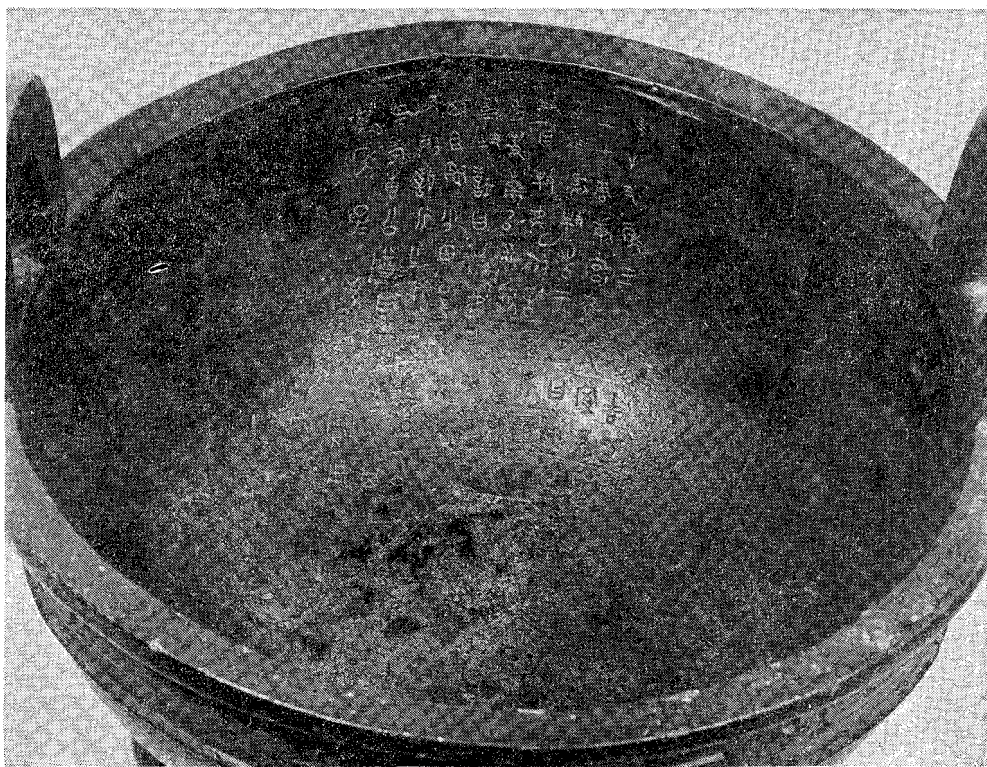


圖14 辭攸从鼎の銘文の周圍の特異な境界線

定の深さの窪みを用意しておき、そこに銘文用の母型から採った、銘文が陽文で移されてゐる柔らかい粘土の薄板をそこに嵌め込まうといふのなら、このやうな不規則な形は極めて不適當だ、といふことである。即ち、この鼎については、その方法は使はれなかったことは疑ひない。

さうするとどういふ方法が採られたであらうか、その問題を明かにするために作ったのが圖15の實測圖である。この實測圖は鼎の一方の耳の基部から他方の耳の基部（いづれも銘文のある側）に物指を渡して固定し、別にもう一つの曲尺と、器壁になるべくぶつからぬやうに特別に作った細身の丸棒状の下げ振りを使い、銘文の野の各交點、および銘の周圍を圍む線上の幾つかの點につき、平面上の位置、器口からの距離を測って作製したものである。必要な點を取るのに丸二日の手間がかかつてゐる。測ってみてわかったことであるが、俯瞰圖で銘文のある側に向つて大きく内彎する銘文の周圍を圍む線の下邊は、側面圖では殆んど内彎しない形で現れるのである。即ち、下邊の線は、器底の低い位置のコントロールと言つて

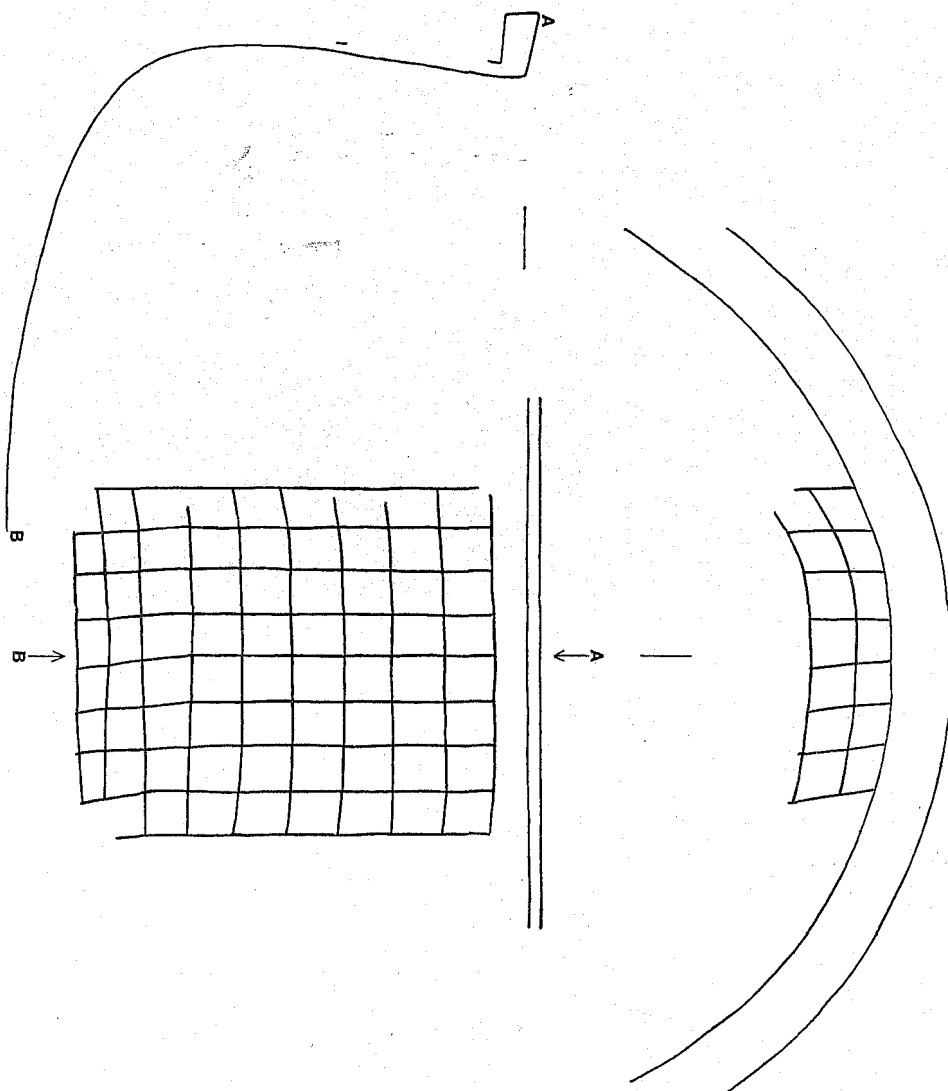


圖16 小克鼎の銘文の周囲の實測圖 1/3

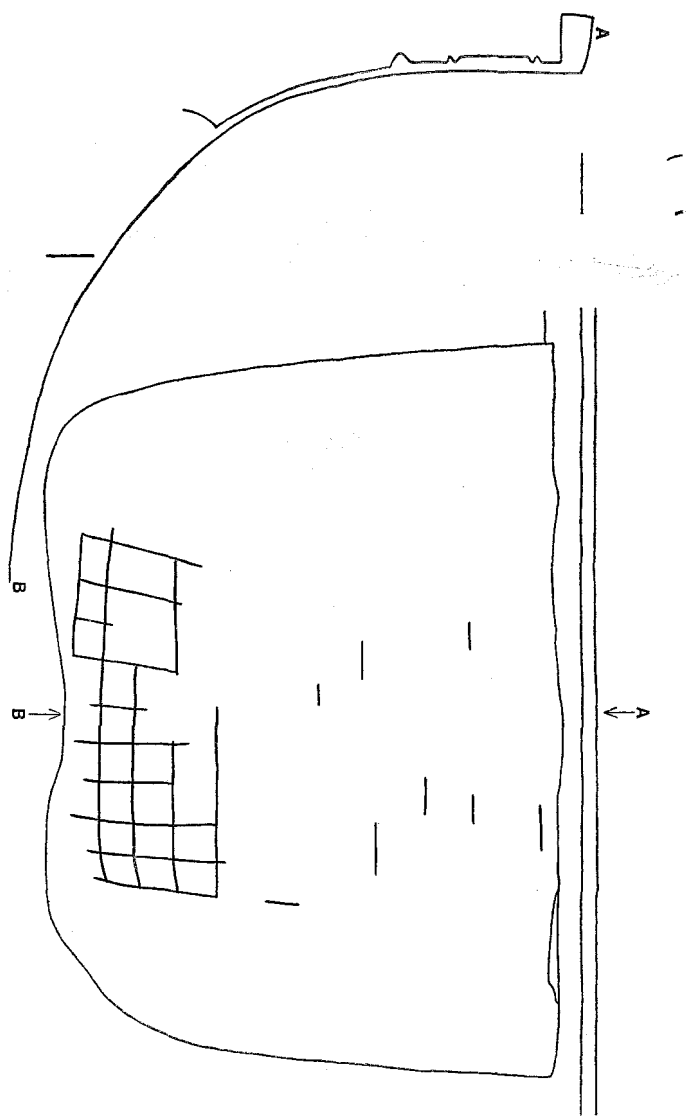


図 15 許攸从鼎の実測図 1/3

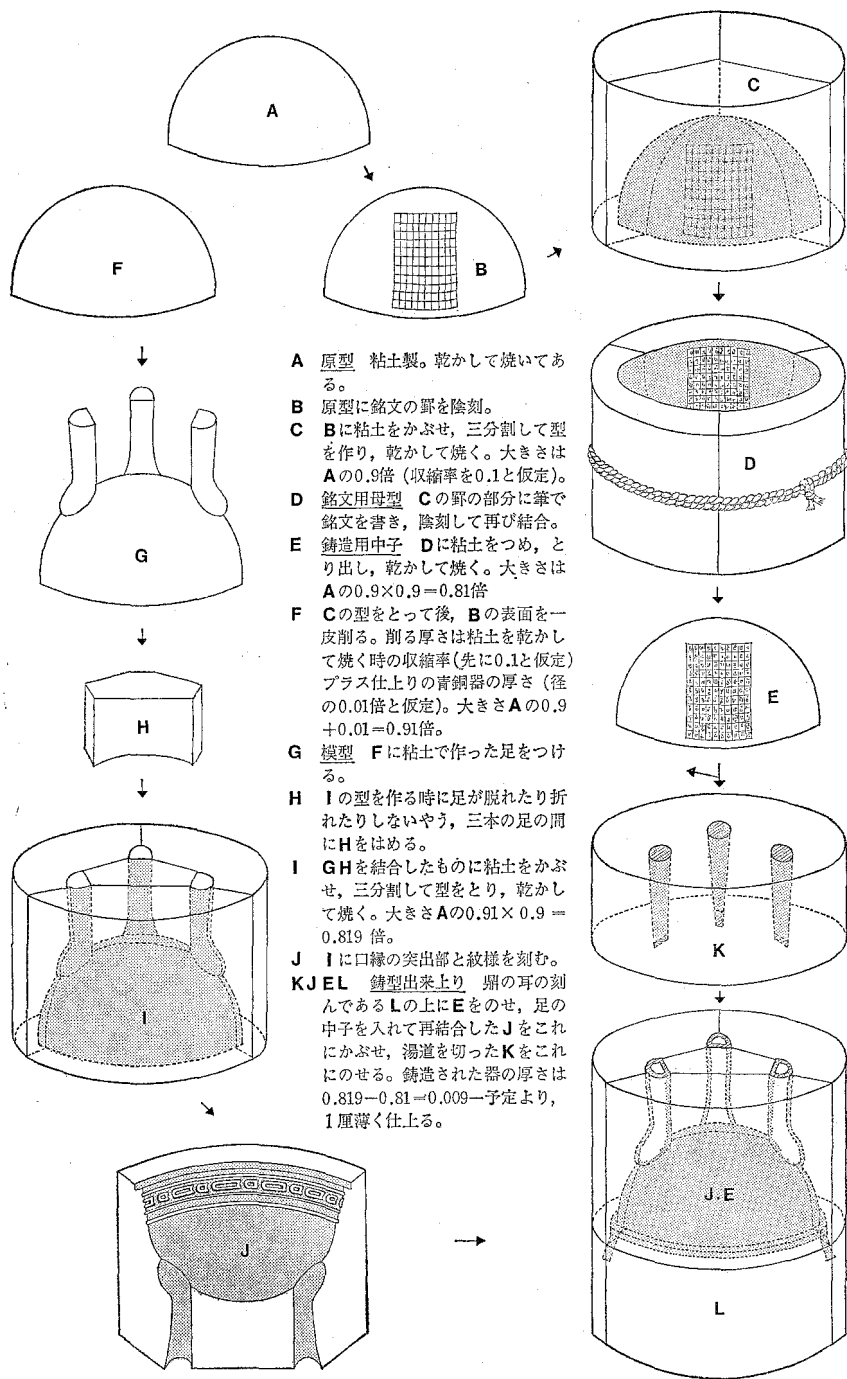


圖17 鬲攸从鼎の鑄型、中子製作の工程想像復原圖

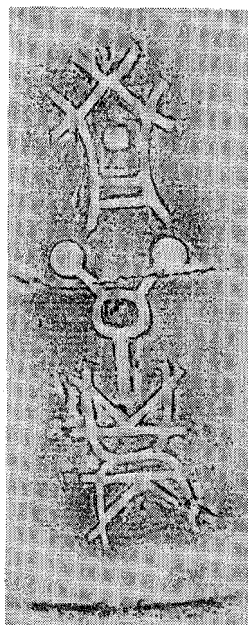
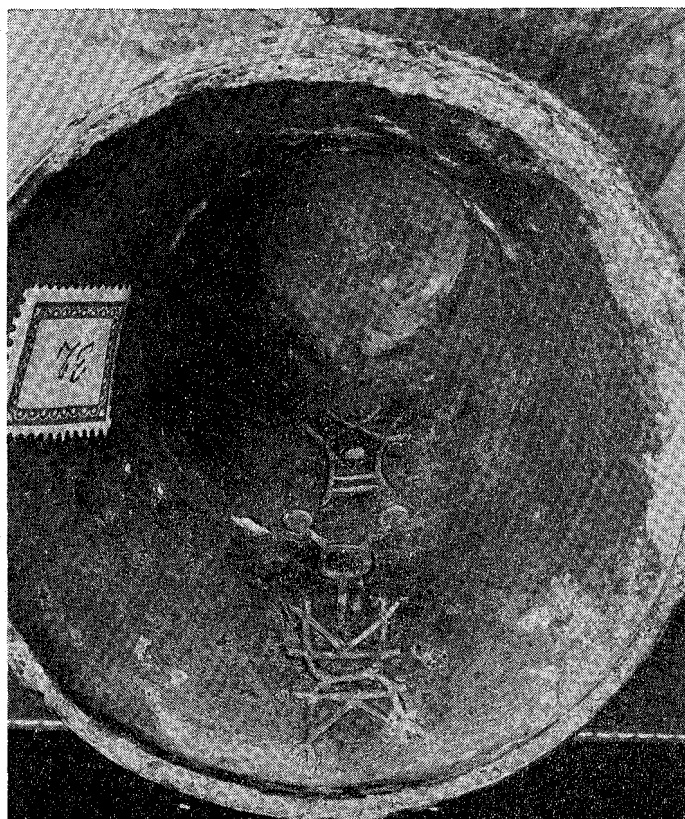


圖18 中子用母型に粘土をつめて鑄造用母型を作った證 拓本 1/1

もよいのである。さうするとこれはどう解釋すべきか。さきにも記したごとく、中子の銘文のある部分だけに銘文用の母型から採った粘土の薄板を貼りつけたといふことが考へられないとすると、これは次のやうに解する他ない。即ち、銘文用の母型は中子全體をおほふに足るものであつた。即ち銘文の部分を含めた中子全體がこの母型から作られたのである。この母型の中に中子用の粘土が下からつめ始められ、銘文の下縁のレベルに達したところで、銘文の部分にそれ用として特に精製された粘土が薄くのばして入念に押し當てられる。ついで再び中子用の粘土が母型につめられる。かうして作られたために、銘文の部分の下縁の線はほぼ器底から少し上った部分のコントロールに當る線を畫いてゐる。また銘文の部分に薄くのばした粘土を押し當て、つづいてそれが未だ柔らかい内に中子の粘土もつづいてつめて行かれたために、銘文の部分を取り圍む粘土と中子の粘土の合さったあととがきつかりした線を成さず、少々不規則になつてゐるのである、と。

銘文を陰刻した中子用の母型に粘土をつめ込んで鑄造に使用する中子を製作するといふ方法が行はれたことを推測せしめる資料として、圖18の觚を旁證として引いておかう。同圖拓本に見るやうに、銘文の「單」の要素を水平方向に中子のひび割れ、ないし不完全に接合された中子の粘土の境界線が走つてゐるが、この線は同圖寫眞に示したやうに、斷續しつつ水平に一まはりしてゐる。銘文用の母型を使って陽文の銘文の印せられた小粘土板を採つて中子に嵌め込むといふ石璋如、バーナードの考へたごとき方法、或ひは銘文の部分だけ中子に薄く粘土を貼りつけ、陽文の銘文を裏字に彫り残すといふ張光遠の考へたごとき方法を使ったのでは、中子本體の製作の不備によつて中子に發生した接ぎの線が、他の部分と同じ状態で銘文の中間を横切るといふ現象は生じないに違ひない。いづれの場合でも銘文の部分だけ中子とは別の粘土が貼りつけられてゐるため、つぎ目ないし割れ目は、生じたにしても中子の他の部分とは同じ形態では生じないはずだからである。即ち、この銘文の中を横切り、水平に一まはりする不規則な凸線は、銘のある部分も、それ以外の部分と同様、等質の粘土が使用されてゐることを推測せしめるものである。そしてこの線の狀況は、中子の土が銘文の陰刻された中子製作用の母型につめ込まれ、その作業の不備によつて生じたもの、としか解釋できないのである。なほ、この觚の足に使用された中子用の母型は、それがラッパ形に開く形を持つため、中に粘土をつめた際、これが乾いて少し收縮すれば簡単に抜きとることが出来る。そこでこの型は複數に割らずに、一つに作られてゐたらしく、縦方向の型の合せ目は残つてゐない。

右に推論したやうな方法で斟攸从鼎を作るとしたら、具體的にどのやうな工程でその鑄型が準備されたか、それを圖解したのが圖17である。別に説明は要しまい。器外上部の鱗紋や弦紋を鑄造用鑄型に彫り込むやうにしたのは、實物の器でそこだけが器表より突出してゐることから推論したのである。樋口隆康氏の發見であるが、毛公鼎の器内には底の中心から内壁を放射狀に三分割する形でかすかな段差が認められる。圖17Dの三分割した母型の合せ目に對應するものに違ひない。

なほ實測圖でみるやうに、斟攸从鼎の残つてゐる野の下部には次のやうな特徴が認められる。即ち、縦の野で口縁に對して垂直なのは右から五番目の野だけで他は傾いてをり、横の野も下の四本は彎曲してゐる。圖16は同じく黒川古文化研究所藏の

小克鼎の野の實測圖であるが、これも縦の野で口縁に終始垂直なのは一番左のものぐらゐで、他は右にゆくに従つて下部、即ち底にかかる部分が次第に大きく右に曲つてをり、横の野は上方は全體に兩端が少し下に曲つてゐて、下から三本目はほぼ眞直、最下のものはやや上反りになつてゐる。

右のやうな特徴をもつた野は、次のごとき原則をもつて引かれた結果生れたものと考へられる。即ち、縦の野は原型を圖17に示したやうに伏せて置き、下部に野を引かうと思ふ位置を等間隔に印する。そのうちの一つから、器の底、即ち伏せて置いた原型の頂點に向ふ方向に、必要な長さの基準野を刻する。次に野を引くために取つた等間隔の印を含み、最初の基準野を含む垂直な面と平行な面と原型との交はる線に沿つて野を刻する。簡単に言へば、葉を落した丸のままのカブラを尻を上に向けてまな板に置き、縦に庖丁を入れて平たい板狀に刻む方式である。

圖16の小克鼎の横の野の反りは大體次のやうな製作法によつて生れたものと思はれる。即ち、原型を伏せて置くと少々下すばまりの形になつてゐて作業がやりにくいので、手前に物をかませて、かませた所の側壁が大體垂直に近くなるやうに傾けて据える。縦向の基準野に横野を引くべき點を等間隔にとる。これらの點を通り、原型を据えた臺と平行な面と原型との交はる線に沿つて野を引く。かうすると下の方、即ち出來上つた器でいへば上方の横野はやや中央が盛り上つた反り、器底にかつた或る點ではほぼ直線、それより更に器底に近い所は中央がくぼんだ反りの線が引ける。圖16の小克鼎で、上方の野が全體に反らず、兩端だけが垂れ下つてゐるのは、右の方法が嚴格には行はれず、何か便宜的な方法が混用された結果であらうが、詳細は明かでない。

圖15の辭攸从鼎の方は、上の方の横野が斷片的にしか残つてゐないので十分明かでないが、底に近い方の横野が中央のくぼんだ反りになつてゐる點は、小克鼎と同様、原型の手前に物をかませて引いた結果と解釋されよう。

四 銘文の文字の書き手の問題

前章に研究対象とした訃攸从鼎銘の最後の行や、また圖9、10に引いた二つの小克鼎銘にも隨所に見られるやうに、銘文の文字が野を無視してこれにまたがって書かれる事實がしばしば觀察される。これはどういふことであらうか。先づ確かなことは、中子に野を引いた人と、その移された銘文用母型の上に銘文の文字を書いた人とは別の人間だったに違ひないといふことである。銘文の文字が野にまたがって書かれてゐるといふのはすると、ただ兩者の間で連絡が不十分だったため、作られた枳目の數と銘文の字數が合はなかつた、といふことであらうか。さういふこともあつたらう。然し例へば圖19に引いた幾父壺の銘をみると、字數は重文符號のついた字も一字と數へて五五字、野は六字詰九行で、一字だけ最後の行の下に喰み出してゐるから字詰と銘文の字數からみてそれでよいのであるが、この場合でも各行六字づつの文字は、一向に野など氣にせず、野を越えて書かれた文字が幾らでもあるのである。文字を書くのが本職の人が、このやうに無造作でよいのであらうか。先に引いた小克鼎の場合でも、引かれた野の枳目の數と銘文の字數が合つてゐないとはいへ、プロの字書きならもつと氣をつけて最後の行の文字があまりバラツとしたり（圖9）、つめつめになつたり（圖10）しないやうに、もう少し上手に書けなかつたものだらうか。下書きの草稿なら兎も角、それに青銅を流し込んで半永久的な紀念物にしようといふのに、この大らかさ。昔は字書きでもこれでよかつたのであらうか。

この問題を考へる前に、これと再びかかはることになるのであるが、陽文の野を伴ふ殷周の青銅器銘文の材料をもう少し検討しておきたい。バーナード氏は陽文の野の簡略な例として、圖20のやうな、短文の、中央に一本當りの線を引いただけの類を引く。⁽²³⁾確かにこの類も格子目の野の最も簡略な類であり、それと同じ目的をもつて、同じ技法を使って作られたものに違ひない。ところでバーナード氏は彼の論文中でなぜかこの例に限って拓本でなく、描き起しの線描きで引用してゐるが、この銘



圖19 野にかかった文字の多い銘 2/3

文で注意されるのは、陰文の銘文の輪廓が中央の當りの線と同様に器表から突出してゐることである。その有様は圖20の拓本およびそへた寫眞にもうかがはれよう。このやうに陽文の當りの線を伴ひ、陰文の銘文の文字の輪廓が陽文の線で縁どられた例は他にも少なくない（圖21—25）。

この陰文の銘を縁どる陽文の線について、バーナード氏は粘土片に銘文が直接裏字陽文に彫られた場合があり、この陽文の線は字の周圍を切つた際の刀のあとだと解してゐる（圖28）。

そしてゲッテンスが引用する鉛製の爵——凸の饗養紋の輪廓が線狀に突出してゐるのは、粘土の鑄型に鋭い道具で紋様の輪廓を彫り込み、次にその間をさらへるといふ技法が使はれた證と説明されてゐる——を引き、この銘文の周圍の陽文の輪廓線も同様な刀のあとだと考へるのである。バーナード氏はゲッテンスの引くやうな鉛器に用ゐられた技法がどの程度青銅器にも

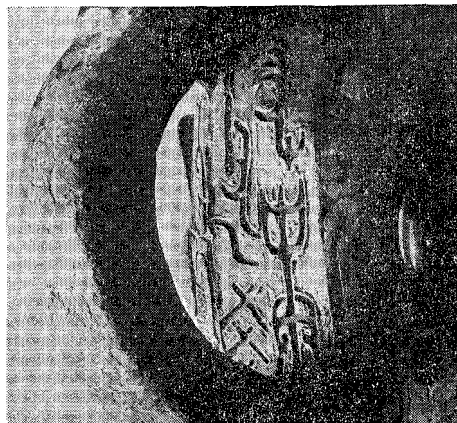
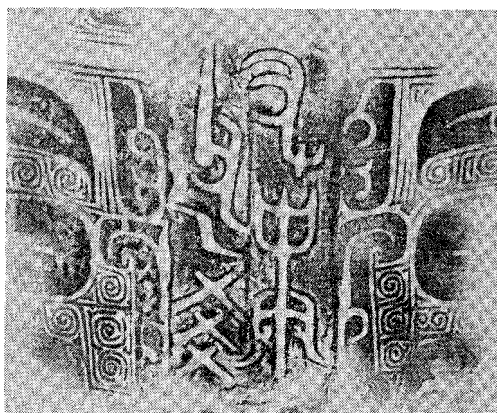


圖20 當りの線と陽文輪廓線のある銘 拓本 1/1

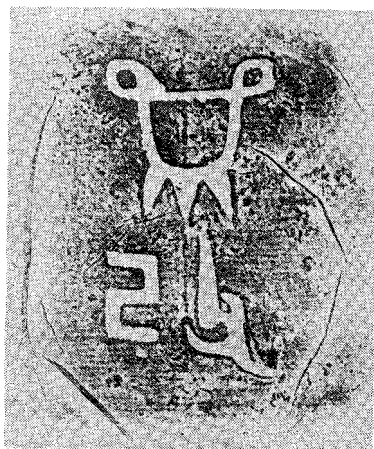


圖21 同 1/1



圖22 同 1/1

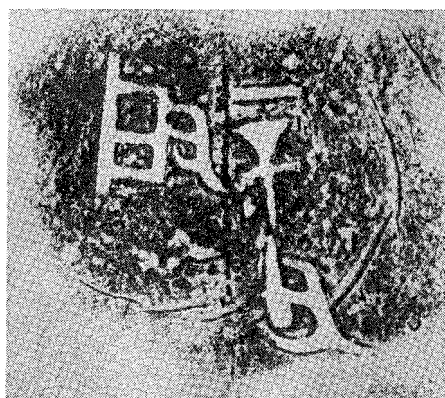


圖23 同 1/1

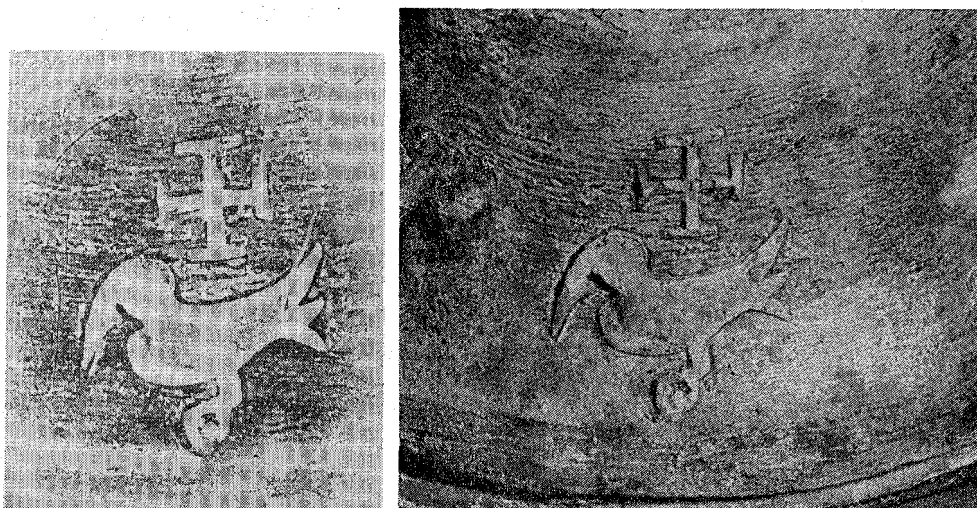


圖24 箒目の地に陽文輪廓線のある銘 拓本 1/1

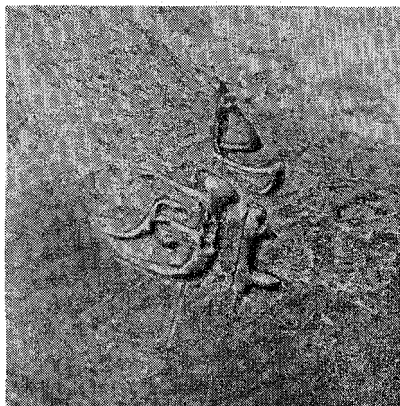


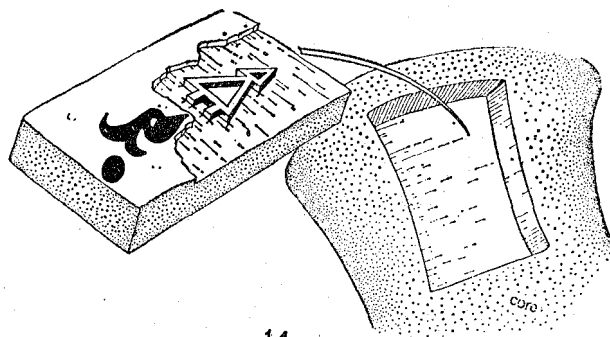
圖25 當りの線と陽文輪廓線のある銘 1/1



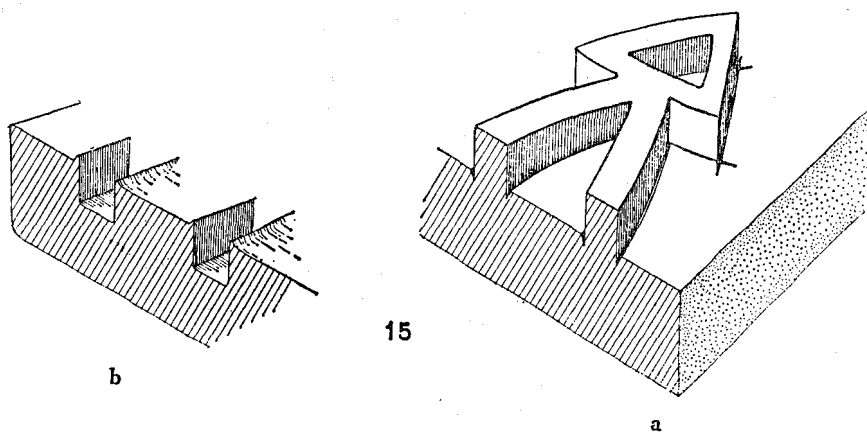
圖26 陽文輪廓線の特に幅広い銘 1/1



圖27 器底の箒目
約 1/2



14



15

圖28 中子の銘文を陽刻する例。バーナード氏の圖



圖29 a 紋様の輪廓の突出する鑄放ちの青銅器



圖29b 同

使はれたかは不明で、青銅器にその證跡を見たことがないといふが、極めて珍らしい例とはいへ、鉛器と同じ技法のあとがありありとかがはれる鑄放しの青銅器の例もあることはある(圖29)。然し鉛器やこの青銅器の場合の陽文の輪廓線は、鑄型の中に彫り込んだ溝の底の周縁に刻まれた線の殘存で、今問題の銘文の場合とは區別されねばならないと思はれる。⁽²⁹⁾その理由は次のごとくである。

即ち、前に記したごとく銘文の野は中子 of 原形となる模型に陰刻されたものであり、同じ目的をもつ當りの線も同様模型に陰刻されたものに相違ないものであるが、圖23、25に見るごとく、銘の輪廓を縁どる陽文の線も、この當りの線と同じレベルにあり、同様な様相を持つてゐる。即ち銘文の周圍の陽文の線も當りの線と同様、同じ幅、同じ高さの比較的均一な線なのである。また圖24の例に明瞭にうかがはれるやうに、粘土の上をならした時についたと思はれる箒目のやうな紋の上に

浅く刻まれたものである。その様は圖27の簋の足の中子についた箒目の上に十文字の格子が刻まれてゐると全く同様である。この陰文の銘の周圍の陽文の線は、また例へば柔らかい粘土に陰文の銘を彫つた時に生ずるその周圍の盛り上り（メクレ）といふやうなものとしては解釋できない。柔らかい粘土に文字を陰刻してみればすぐわかるが、メクレは文字の周圍の一部分に、不規則な厚さに生じはするが、このやうに均一な太さには生じない。またメクレであれば圖25にあるやうに地の箒目を切ることはなく、それを巻き込んで盛り上るはずである。また陰文の銘の文字の周圍の突起の中には、圖26の「女」の要素の右邊にみるやうな、著るしく幅の廣い連續したものがあつたが、これなどは特に粘土のメクレとしては解釋し難い事例である。

圖30は銘文の野および文字の輪廓の突線の由來についての推測を裏づける資料である。人文科學研究所考古資料に残るもので、寫眞と銘の部分の拓本しか知られないが、傳西安出土、羅振玉舊藏、寫眞は現寸と記録されてゐる。右方五分ノ二程は補はれたものであるが、全體の原形をうかがふに足る。形、大きさからみると、丈の高い卣の蓋の中子と思はれる。うまく鑄上つた場合は通常破壊して取り除かるべきものが、このやうにそっくりした形で残つてゐるのは、恐らく例へば湯廻りが惡かつたとかの理由で壞されな残つたものと想像される。圖30bは原板から銘の部分のみを引伸したものであるが、地は平らにならした粘土の面に押し當てられた柔かい粘土のウブな膚の状態を示し、銘文を凸に彫り残したあとを刀でさらへたやうな痕跡は全くない。そして「彝」の字の筆劃の周圍をとり圍む陰線——鑄上つた青銅器では銘の周圍の陽文の輪廓線となる——が野と同様、頭の圓いもので刻されたものであることが寫眞によくうかがはれる。この刻線を、圖31、32の鑄型に明らかに刀で刻み込んだ線と比較してみれば、その相違は更にはっきりと認識されよう。

陰文の銘の輪廓を圍む陽文の線が、銘文用の型を採る模型に刻された野や當りの線と同じ工程中に刻されたものであることを示す傍證は他にもある。圖33は觚の銘であるが、文字の銘をとり圍む陽文の線があり、その中に陽文の輪廓で圍まれた陰文の銘があるが、「辛」の字は、その周圍を頂點を下にした二等邊三解形の陽文で圍まれてゐる。この三角形は習字をしたことのある者なら誰でも同意するであらう通り、「辛」字を書く前に、全體の形のバランスを誤らぬやうに豫め見當をつけた時の

線である。即ち、これは明かに「辛」字を圍む陽文の線が、陰文の文字を彫るよりも一つ前の段階、即ち野ないし當りの線と同じ段階に刻されたことを推論せしめるものである。

また圖34、35は爵と罍の同文の銘である。組合せの圖象記號であるが、一番下の盾形の要素は細い陽文の線で表はされてゐ

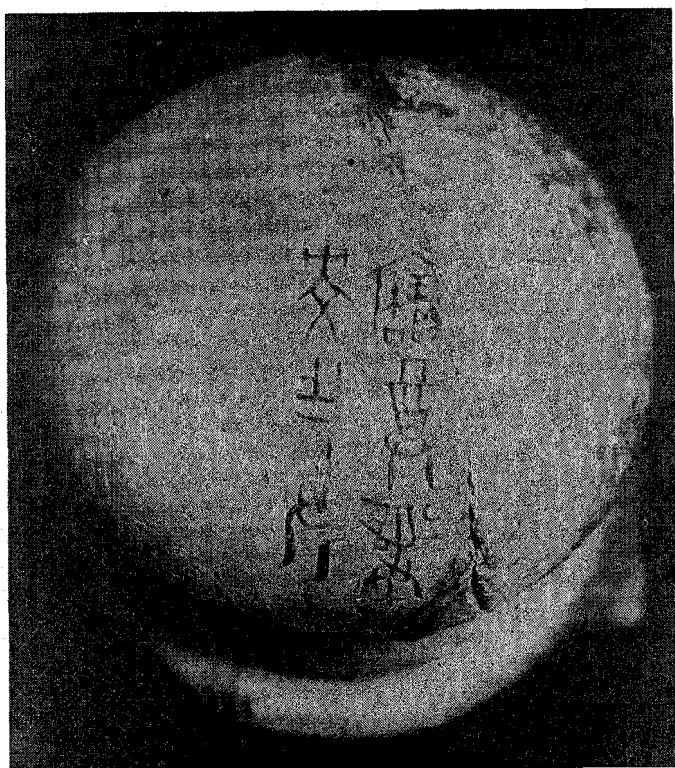


圖30 a 銘文のついた中子

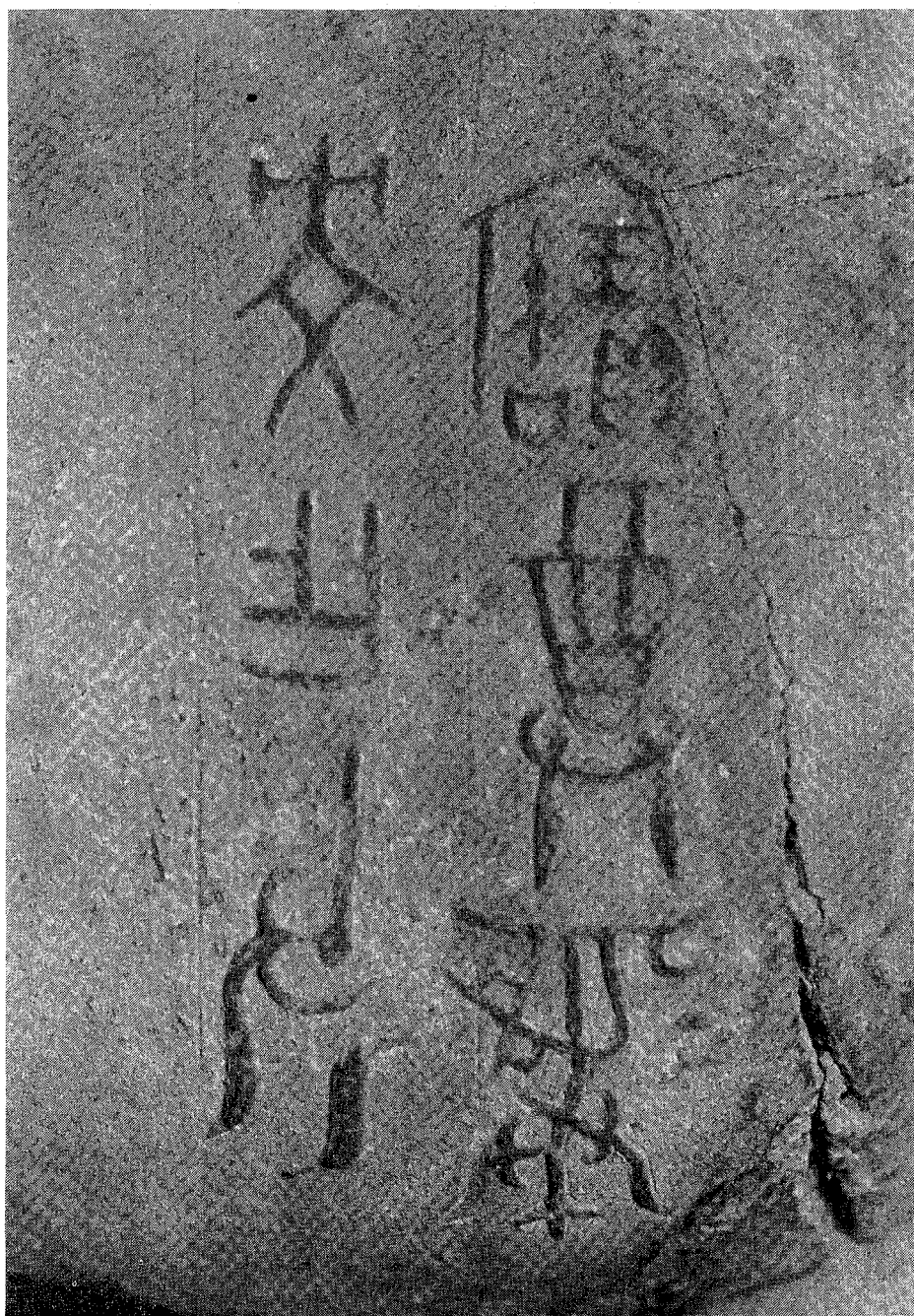


圖30 b 同 擴大寫眞



圖31 刀で仕上げた鑄型

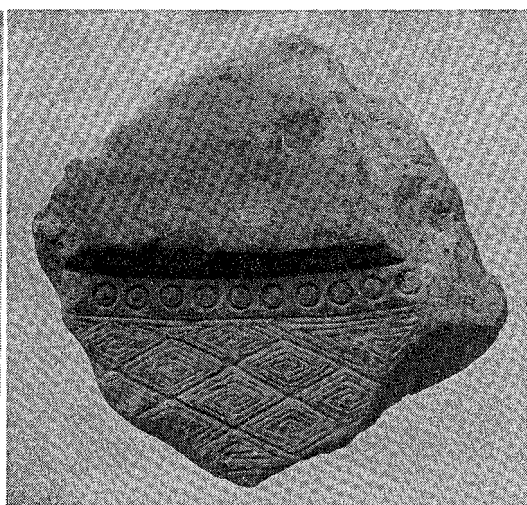


圖32 同

るのに、その上方の他の要素は陰文と陽文の輪廓線で表はされてゐる。一番下の細い線で書いた陽文と、上方の陰文を縁どる細い陽文の線が、異なった工程から由來すると考へることはちよつと無理である——となると、これも圖33と同様な事實を證するものといふ他ない。

かう見ると銘文の輪廓沿ひにめぐる陽文の線は、當りの線と同じ工程において引かれたと考へざるをえない。もしバーナードの考へたやうに、銘文の周圍を縁どるこの陽文が、銘文を陽文に彫つた際の刀のあとと解釋すると、當りの線は、銘文を陽文で彫り残し、地を平らにさらへた後に刻されたと見なければならなくなる。これが野の場合であれば、銘文の原の文章が書かれてゐた木の方形の板ないし絹に引かれてゐた野線を、原文の様相を再現するために銅器に寫したのだ、といふやうな説明も成り立ちうる。ところが明かに銘文を書くべき位置を示す目印でしかない當りの線を、銘文を陽刻したために消えてしまったので、一度さらへた粘土板の地にもう一度刻したのだ、などといふことは説明にもならない。バーナードも銘文を裏字で陽刻した後で、さらへた地に野を引く理由は全くない、との意見である。⁽³⁾

以上、銘文の文字の書かるべき位置を示す野や當りの線が、始め中子のもとなる模型の上に陰刻されたものであることに誤りない限り、圖20—25、33—35に示したやうな、出来上つた青銅器で陰文の輪廓をとり圍んでゐる陽文の線も、野や當りの線と同じ段階において、同じ模型に陰刻されたものと



圖33 陽文輪廓線がどの工程に屬するかを示す例 1/1

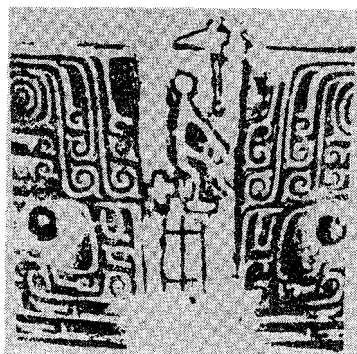


圖34 同 1/1

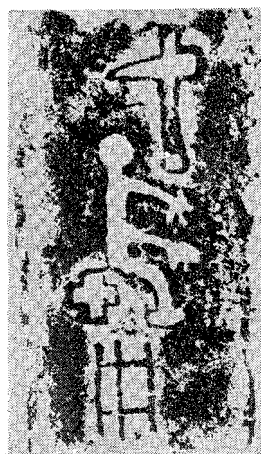


圖35 同 1/1

考へざるを得ないことが明らかになった。この場合、銘文は刻線をもって籠字に書かれたのである。この籠字は當りの線と共に銘文用の母型に移され、籠字の中は彫り窪められるといふのが通常の工程であつたに違ひない。この籠字の中に彫り窪められた陰文の銘が改めて中子に移され、さきに引いた圖20—25等々のやうな銘文に鑄造されたことは前章に考へた工程に照して疑ひのない所である。

とはいへ、前章に考察した例のごとくに、銘文用の母型に野ないし當りの線に移してから銘文をそこに墨書し、その文字を陰刻したらそれでよさうなものを、何故その一段階前の、模型に野を引く段階で籠字の銘を陰刻したりしたのであらうか。奇妙なことであるとはいへ、これは確かに行はれたことなのである。

第一に籠字だけでその中を彫り窪めてない銘といふものも存在する。圖36がその一例である。圖37も寫眞はないが、この銘は雙鉤で圈足の内側にある、と記される。圖38も同じ類と見られる。圖39の「車」形の圖象記號の左上部、車の衡に當る筆劃の先をみると、籠字の一部に陰刻されない部分が残つてゐる。これも籠字を刻したのと、陰文になった部分を彫つたのが別の工程に屬することを示す例である。

この圖39で興味深いことは、陰文を刻した部分を觀察すると、陽文の輪廓の残る部分（上方）と、それが全く見られない部分のあることである。これは、

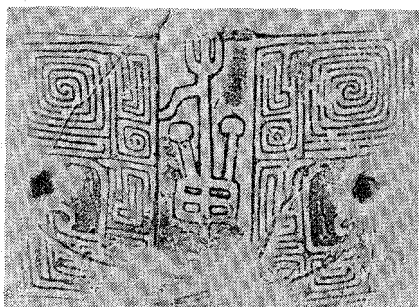


圖36 陽文籠字の銘 拓本 1/1

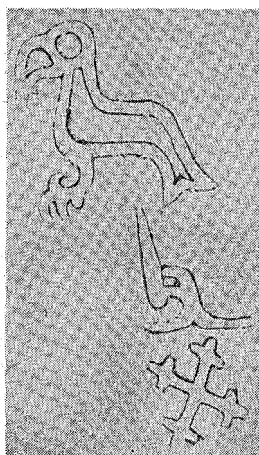


圖37 同 1/1

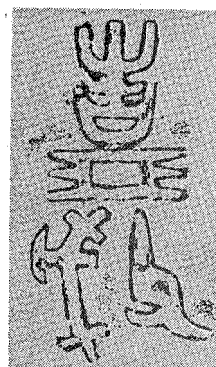


圖38 同 1/1

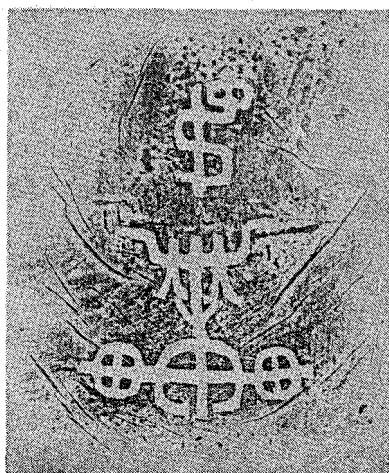


圖39 陽文籠字が部分的に残る銘 拓本 1/1



圖40 陽文籠字の銘 1/1



圖41 圖40と同文で陰文の銘 1/1



圖42 陽文輪廓線の喰み出す例 1/1



圖43 陰文の彫り損ひの例 1/1

陰文を彫る段階で、籠字の彫り残されることも、またすっかり陰文によってさらへ取られてしまふ場合もあったことを示すものである。多くの銘文に陽文の輪廓線が見られないのについては、それが鑄造後の仕上げによって磨り減らされて失はれた場合のほか、陰文を彫る段階で削り去られる場合もあったことが知られる。

圖40は尊の銘であるが、文章をなす銘としては珍しく、陽文の輪廓線が完全に残っている——といふより、その間隔がかなり狭い部分がある所からみて、これは籠字のままかとも考へられる。拓本だけでは判定し難いが。ところで、これと同文の銘の尊があり（圖41）、この方は完全な陰文である。何かの事情で圖40の方は籠字のまま鑄造に移され、圖41の方は陰文を彫る段階で籠字がきれいにさらへられてしまったものと推測される。

圖42の上の圖象記號の左側の太い劃の上部には、その籠字を刻した際に喰み出したと見られる餘分の線が出てゐる。これも籠字の中を陰刻したことを示すものといへる。もっともこの場合は、バーナード氏の、陽文に彫りのこした文字の根方をさらへた線として解釋することも可能である。然し次の例は決定的である。即ち圖43の圖象記號をみると、中央の橢圓と、中央の垂直の劃は陰文の溝がつながつてゐなければならぬのに、陽文の線で切られてゐる部分がある。これは橢圓と垂直の劃を籠字で畫く段階で書きよいやうに兩者別々に交叉する線をもつて書いたものを、陰文を彫る段階でもとの籠字の陽の線を忠實に彫り残してしまつた結果、このやうなものが出來たとしか解釋し様があるまい。これなどはバーナード氏の考へ方では全く解釋がつかない。

右の判斷に誤りないとなると、鑄型を作る工人は、ここに銘文を彫るべし、といふ印として模型に當りの線を引き、それから銘文用の型をとつて銘文を入れる者に引渡す——この段階で銘文を彫るための下書きをする者は少なくとも、ただの工人ではなく、文字に湛能な書記的な職業の者だらうと考へられてゐた——のではなく、このやうに銘を入れるべし、といふ意味で、入れるべき文字の籠字まで刻んでから渡す場合もしばしばあった、と考へざるをえないことになる。この籠字はどの例でも見事に書かれてゐる所からみると、文字に湛能な書記的な職業の人間はこの段階で手を貸したのである。

野ないし當りの線だけの入った銘文用の型が出来た所でこれに銘文を墨書し、陰刻したらよさうなものを、何故もう一つ前の段階で専門的な字書きが手を出して文字を入れ（裏字に書かねばならない面倒もある）、籠字にした上で銘文用の型を作るといふやうな面倒なことをしたのか。それについてはかう考へざるを得まい。つまり籠字を書いておいてやらなければ、ともな銘文の字が入らない心配があったからだ、と。即ち銘を入れる段階には文字が書けない、ないしは上手には書けない、文字を書くことが専門ではない人間が介入して来ることになってゐた所から、このやうな配慮がなされたのだ、と。

ここでこの章の始めに提出した疑問に話が歸ってくる。始めに考へたことは、西周後期の、野をあまり眼中におかない、あまりにも無造作な銘文の書き振は、専門の字書きの書いたものとしてはどうもおかしい、といふことであつた。この殷ないし西周の早い時期の觚、爵、尊などの銘の製作における籠字の存在から推測される事も、同様銘を入れる段階における、文字を書くことを専門としない人間の介入である。

祭祀用の青銅器に、作器者である一族の紋章であり、その土地の神ないしはその族の遠い祖先神の名に讀むこともできる象徴的な記號である圖象記號⁽²⁴⁾を入れ、また十千名で呼ばれる死んだ父祖の名を入れる行爲は、その器の鬼神の世界における所屬を決定することであり、青銅器製作の工程において最も重要な節目になる儀式であつたに相違ない。そして青銅器に銘文を入れるのは、具體的には出来上つた青銅器ではなく、ここに問題の、鑄型を作る段階の一つにおいてなのである。この銘文入れの行爲に參與することは、またこの青銅器が出来上つてから、これを使用して行ふ祭祀から結果する御利益に、より深く關與することになると考へられるが、さうなるとこの銘文の記入を行ふにふさはしいのは、一介の技術者であるよりも、恐らく作器の主體である族の主だつたメンバーとか、彼等と神靈とを中介する神官といった人達であつたと見るべきであらう。當然さういふ人間は文字をきれいに書くことに熟達してゐるとは限らないのである。銘文用の型に移された籠字の中を長老が筆をとって朱か何かでなぞることで儀式は終り、あとはまた工人の手に移され、長老の筆のあと、つまりは籠字の中が陰刻されて銘文用の型はめでたく出来上り、といふことになつたと想像される。今日のお手植の松的な行事である。

殷後期から西周前期ごろの、かういった圖象記號ないし十千の父祖名から成る短かい銘文記入式で、筆を執つて籠字をなぞった人間が一人か、或ひは複數であつたかについては知る手がかりが今のところない。然し西周時代、長文の銘の場合は明かに複數である。圖9、10に引いた二つの小克鼎銘の書き手が別人であることは一見して明かであるが、計七器ある同文の小克鼎のうちの、他の五器も總て別筆である⁽³⁵⁾。また例へば『扶風齊家村青銅器群』、『長安張家坡西周銅器群』を開いて注意深く検討してみれば知られることであるが、同文の銘の器が幾つあつても、各銘文は組合はされた蓋、器の場合も含めてすべて別手によつて書かれてゐるのである。(例へば圖44—46)。我々が一九六八年から一九七七年まで、足かけ一〇年にわたつて人文科學研究所で行つてきた共同研究において認識されたことであるが、このことは西周時代の文章をなした銘文について認められる大原則なのである⁽³⁷⁾。青銅器の工房、或ひはその工房に關りの深い官に、いくら銘文の書き手が多數ゐたにしても、一人に一回以上は書かせず、同一器の蓋と器の場合も例外を認めず、それも上手も下手も一緒にして、惡平等な分擔のさせ方をするのが大原則といふのは、何とも理解に困しむ事實である。

この事實はやはり青銅彝器を作つて銘を入れる場合には、それを使用することになる一族のメンバーが銘文記入の儀式において親しく筆を執つて銘の文字を書くといふ殷時代に始まる習俗が西周後期にまで存續してをり、籠字方式がなくなつたために複數の銘文記入の有資格者が各自の字の書きぐせによつてその姿を現した、といふやうに解釋すべきと思はれる。この銘文記入の儀式には、なるべく多くの成員が參加できるやうに、同一人には一つ以上は書かせず、同一器の蓋と器のやうな場合にも例外を設けなかつた、といふやうなことがあつたと考へざるをえない。かう考へて始めて同じ文章の銘でありながら、字配りも、字の書きぐせも、實に多様なものが混つて一セットを形成してゐる事實が解釋されよう。同じ工房ないし同じ官に屬する字書きが銘文を書いたと考へては、この多様性は解釋が難かしい⁽³⁸⁾。

バーナード氏は前にも記したやうに、粘土の平らな板の表に銘文を陰刻して焼き、その母型に押しつけて得た陽文の裏字を持つ粘土板を豫め用意した中子の窪みの中に嵌め込むといふ方法を想定してゐるのであるが、同文銘の蓋器は勿論、何器分も

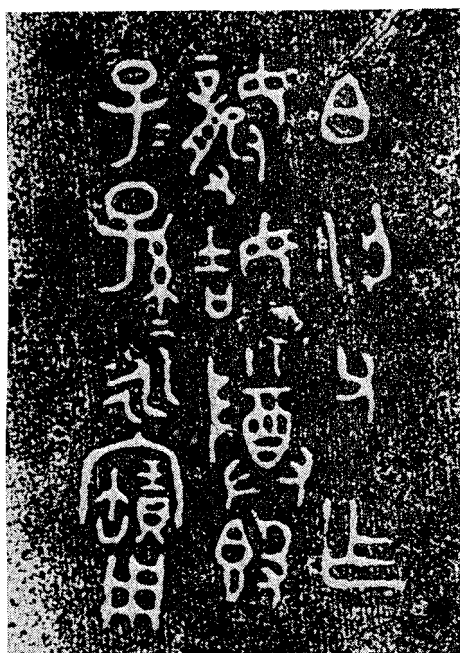


圖44 一つ一つ書き手の違ふ銘 1/1



圖45 同 1/1



圖46 同 1/1

の使用にたへる母型を二度使用する事例が決してない事實の説明に困しんでゐる。⁽³⁹⁾バーナード氏は青銅彝器でも銘を入れる例は全體の一〇パーセントと極めて少數であることをもつて説明しようとするが、これは理由にもならない。また銘文の母型を作るのは、紋様を彫るのと比べて比較にならないほど手間のかからないことだったから、といふが、同一器の蓋と器であればこれで説明がつくとしても、同形の器が何器も一セットになった前引のやうな例の場合、これでは再び説明に困ることになる。況んや、バーナード氏は注意してゐないが、先に指摘したやうに何器ものセット中で同一の書き手のものが二つとないとなれば益々である。この事實に對しては、筆者の解釋のごとく、單なる製造技術上の問題としてでなく、それとは別の方からする説明が必要なのである。

更に考へてみるに、鑄上つた青銅器に銘文を陰文で表はしたいのなら、なぜ中子に裏字で下書をし、それを陽文に彫り残すといふ比較的手間のかからない方法をとらないで——このやうな技法もあったといふのが張光遠氏の主張である——⁽⁴⁰⁾先に見たやうな、裏字でなく、正字で下書きをした銘を陰刻し、それから陽文裏字つきの中子をとる、といった複雑な手續きを採用したのか、といふ問題は、やはり銘文入りの青銅器鑄造の工程の一段階として、前述のごとき専門の字書きでない人間が銘文を書き入れる、といふ儀式が介在したと考へることよつて始めてよく説明されるのではなからうか。當時の専門の工人は、あれだけ複雑な青銅器の動物紋様とか細かい羽紋、渦紋を、粘土の模型や鑄型に浮彫や細かい刻線で彫り込んでゆく技術を持つてゐたのである。中子に裏字で銘を書き、陽文に彫り残す位のこととは、それが何百字の銘であらうと造作もないことだったに違ひない。⁽⁴¹⁾事實殷、西周初の工人は先に引いたやうに、中子用の鑄型を採るための、模型を一皮削つたものに、裏字の籠字で見事な文字を刻してゐる。當時の技術者は、専門家でない人に銘を書き入れてもらはなければならぬからこそ、大變な手間をかけて裏字ではなく、日常書くのと全く變らない字で銘文を書いてもらふことのできる、中子用の母型といったものを用意したのである。

以上によつて、西周時代に銘文用母型に文字を入れる段階で、文字を書くことが必ずしも専門でない所の、その器を使用することになる者の一族のメンバーが参加したことが推論されたのであるが、その場合、一人乃至少數の適格のメンバーが参加するだけでもよさうなものを、なぜ同一人に一度しか筆を執らせないといふやうな原則がとられたのかについては、依然として説明されないままである。

便宜上注(37)に引いた小臣謎簋を引けば、これは松丸氏の分類⁽⁴²⁾に當てはめてみると諸侯受賜器——周室工房作器で周室作銘器といふことにならうが、その別筆の銘が蓋器計四個知られてゐるといふことは、小臣謎も含めたその一族の最低四人のメンバーが銘文用母型に銘文の下書きを書き入れるため、周室の青銅器工房に足を運ばされたといふことになる。これはちよつと侯馬盟書からうかがはれる宗盟⁽⁴⁾を思い起させる。そこでは同族の者多數が集められ、一人一人が自分の名の入った盟の文章を朱書した玉や石の板を牲と共に埋めて、盟主の意向に背かないことを盟はせられてゐるのである。連想によつてかうも考へられよう。即ち西周の王は、自分の命のおかげで小臣謎が祭器を作つて祖先祭祀を行ひ、幸福な日々の保證をえたことを、小臣謎とその一族の者に肝に銘ぜしめ、自分の權力を再確認せしむべく彼等を集め、一人一人に銘文記入を行はせたのではないかと。

然し多勢の人の手になる同文銘には、圖44—46に引いたごとき、諸侯自作銘も多數見出され、これらについては右のやうな解釋は全く適用できないのである。さうすると、青銅器の銘文記入に多勢の人間が平等に一回だけ執筆してゐることについて言へることは、差當り次のやうな極く平凡な解釋であらう。即ち、同時代の所謂「諸侯」が氏族共同體的なものであったから、重要な行事には一族のメンバーが平等に参加した。そして一族の繁榮を確保する上に不可欠な祖先祭祀に使用する青銅器を作るに當つて、それに銘文を入れることもその類の重要な行事であつた、といふことである。

西周時代、諸侯の封建に際して氏族が一單位として賜與の對象となつてゐることは『左傳』定公四年の魯、衛、晋の封建に關する衛の子魚の語つた話、或ひは宜侯矢簋等の金文によつてよく知られる所であり、また降つて春秋時代にも共同體的な氏

族が邑と附隨して分與の對象となつてゐる。⁽⁴⁶⁾西周時代に冊命賜與の對象として金文に現れる名前も、勿論個人の名ではあつても、職務を執行し、采邑の管理を行ふ主體は、その個人に代表される氏族共同體であつたに相違ない。そこで銘文の文章中でも、冊命賜與される人名は個人名であるが、それを青銅器に記入するには氏族のメンバーが平等に参加した、といふわけである。

以上、殷周青銅器の遺物、銘文の拓本、鑄型等の觀察に基づいて、その鑄造技術に研究を加へ、更に銘文を作る際の儀式的存在、それに關與する人の問題にまで論及した。そのやうな儀式については、いふまでもないことであるが、傳統的な文獻資料には何の痕跡も残つてゐないものである。

補論

他にこの論文の材料を集める段階において銘文鑄造技法に關する問題を考へる上で興味深い例を見出したので紹介して參考に供しておく。

(1) 銘文の鑄型の破損例

殷周青銅器の銘文を觀察してゐると、次に引くやうな、筆劃の損壞した例が時に見出される。圖47では「封」字形の右側の下の枝が、圖48では「𠂔」字形の吹流しが夫々折れてゐる。圖49では「𠂔」の縦劃が折れて少々づれてゐる。圖50は長安張家坡出土の例であるが、四行目第三字の「人」字形の下部にも同様な現象がみられる。圖51の「父」字、圖52の上の圖象記號となると、折れてづれた程度がさらに甚だしい。圖53をみると、器銘で確かめられる亞中簠形の圖象記號の「亞」字形の一部が、この蓋銘ではひどく離れた所にばらばらに散つてゐる。圖54の師西簠でも第一行の最下の「右」字が又と口がばらばらになつて右下の方に飛んでゐる。

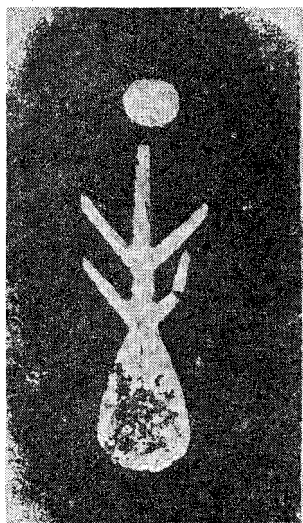


圖47 筆劃の損壞した銘 1/1



圖48 同 1/1

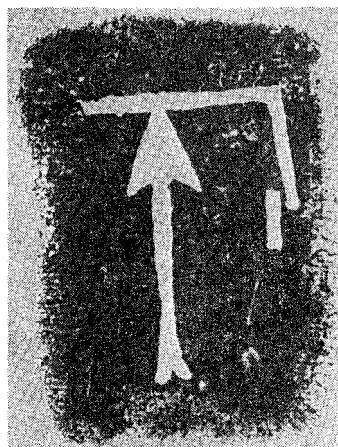


圖49 同 1/1

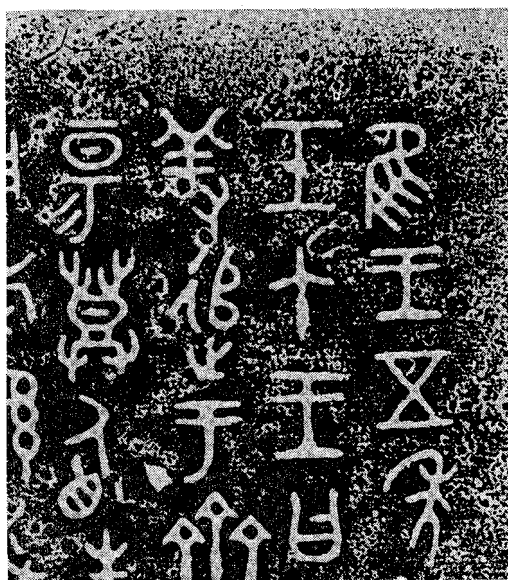


圖50 同 1/1



圖51 同 3/4

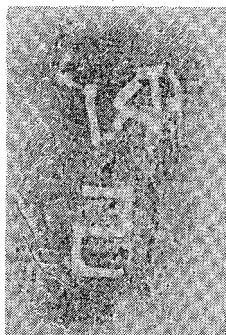


圖52 筆劃の損壞した銘 1/1

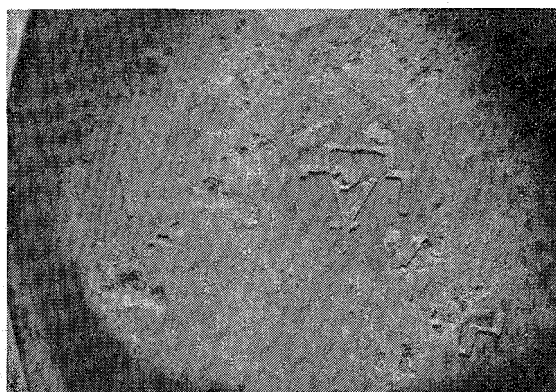


圖53 同 1/1

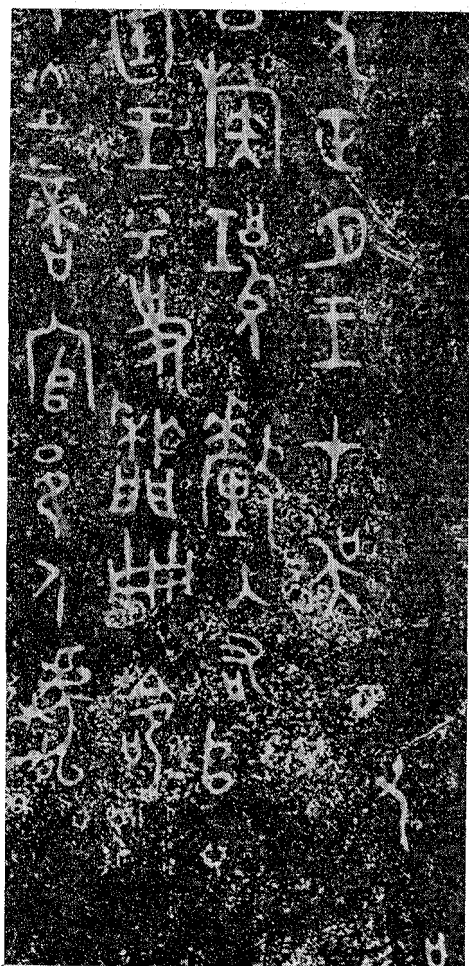


圖54 同 1/1

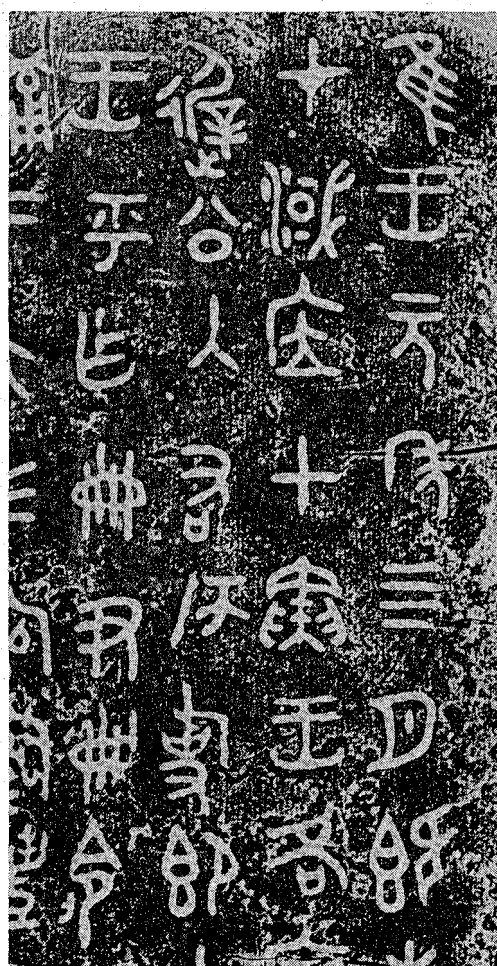


圖55 同 1/1

これらは完成した鑄型に湯を流し込んだ段階で銘文の筆劃の一部が中子から分離して押し流されたといふ以外に考へ様があるまい。銘文の文字に當る突出部が、中子に例へば移し繪のやうな方法で移し貼られたといふのなら、その移す作業の途中で一部が折れてづれた位置に貼りつくといふやうな事故もありうることであるが、そのやうな技術が實際に行はれた可能性は、鑄型の材質からみてありえないからである。

湯を流し込んだ時に銘文の筆劃の部分だけが脱れたからには、中子本體と銘文の筆劃の部分の粘土とがよくなじんでゐないことがあつたに相違ない。そこで圖30bの中子を見てみると、中子の土は砂粒も混つてゐるらしい、比較的粗い粘土と見受けられる。このやうな土が中子に適してゐたものと思はれる。ところで銘文のデリケートな陰刻の溝の隅々まで入り込んで鮮明な銘文を鑄出すのには、このやうな粘土はあまり適當でない。先に斟攸从鼎のところ、銘文の部分にだけ中子の他の部分とは違つた粘土が使用されたであらうことを推測したが、この卣の蓋では銘文の部分全體ではなく、銘文の文字の筆劃の溝だけに別の精良な粘土がつめ込まれたのではないかと想像される。「彝」字の二つの點の内の下の一つ、「𠂔」字の左右上部、「乙」の上下の端など、鑄込まれた青銅器にくつついて突出部だけが脱れて、脱れた部分と中子の地がきれいに平らになつた部分があることからさう想像されるのである。傳安陽出土の青銅器の鑄型で、細かい紋様の彫り込まれた鑄型の突出部が、鑄上つた青銅器について脱れてゐる場合はいくらでもあることであるが、その脱れたあとの割れ口は、圖30bの「彝」字の左下にみるやうにざらざらしてゐる點、右に指摘した脱れあつたと相違がある⁴⁶。

このやうな技法が用ゐられ、銘文の筆劃を彫り込んだ溝につめた精良な粘土と、中子の少々粗い粘土が十分なじんでゐない場合が時々あつたとすれば、始めに引いたやうな事故もうまく説明されることにならう。勿論脱れた筆劃の粘土が少し動いただけで銘文として鑄出されてゐるといふのは珍らしい例で、きれいに吹飛んで見えなくなつてゐることも多かつたと思はれる。圖55の四行目、上から七字目の「命」の從ふ「口」などはその例である。

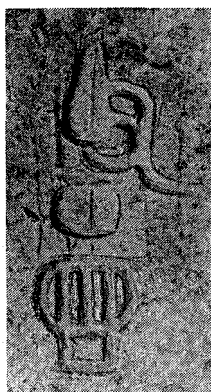


圖56 銘文の筆劃の底に
凸線のある例 1/1

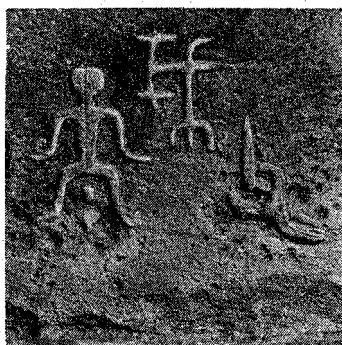


圖57 同 1/1

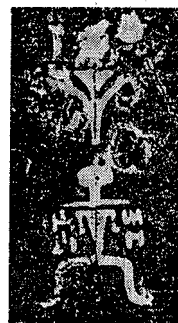


圖58 同 1/1

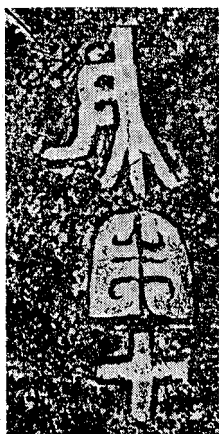


圖59 同 1/1

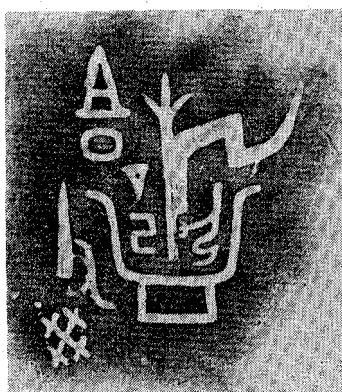


圖60 同 1/1

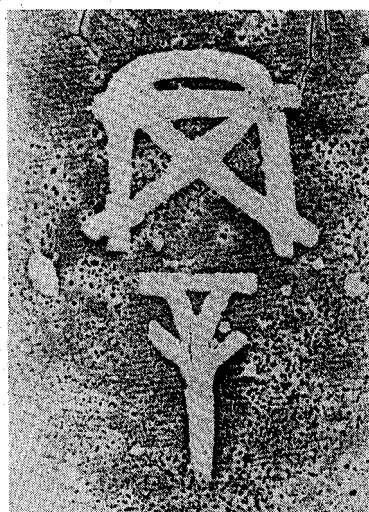


圖61 同 1/1



圖62 同 1/1



圖63 同 1/1

(2) 銘文の筆劃の溝の底の凸線

殷、西周時代の圖象記號と父祖名のための短かい銘文の中には、圖56—63までに示したとき、銘文の筆劃の溝の底に細い垂直方向の凸線が見出される例がある。これらは一見して文字を書く際、位置を定めるために引いてあった線のごとくに見える。この縦線は凸線に鑄出されてゐるからには、中子では陽文の文字の上に陰刻されてゐたわけである。するともしきういふ性質の線であればこの線は

(a) この陽文を彫り残す前に、中子を作る材料、ないしは中子の上に銘文の部分にだけ貼った薄い粘土の上に、目印として刻まれてゐた線と解して、張光遠説の銘文製作法の存在を裏づける資料として認めることも可能といふことになる。

(b) 然しまた、先に筆者が推測した方法によつて中子の上に陽文の文字を仕上げた後で、中子のどの位置を外型の一定の位置に對應する方向づけるかを定める際の目安として、銘文の上に線で目印をつけた、と解することも可能である。

これは(a)(b)いづれに解すべきであらうか、圖56の例をみると、「文」、「丁」、「𠂔」の文字、記號の凹みの輪廓沿ひに、先に圖20—25に見たやうな陽文の線が巡つてゐる。そして「父」字の左、同字の从ふ「又」の三本の線の合流する位置、およびそれから少し離れた右方に、計三本の垂直線が陽文でのこり、𠂔の上方にもこの記號の上部の橢圓形の部分の位置を定めるためのものと思はれる垂直の線が見られる。これらの、銘文を書くべき位置を定めるための線、銘文の溝の輪廓沿ひの陽文の籠字の線の存在は、この銘文のついた中子が筆者の先に詳細に推測を加へた、中子用母型を中介とする製作法によつて製作されたことを證するものである。然らば「父」「丁」二字の銘文の溝の底にのこる陽文の縦線については、(b)の解釋を採らざるをえないことにならう。

圖57の例は「父」、「戊」、「𠂔」と三つの文字、記號が横に並ぶ中で、左端の「𠂔」の記號にだけ縦の線が加へられてゐる。縦線が銘文を記入すべき位置を定めるためのものだとすると、最初の「父」字の所になく、最後の圖象記號の所にだけあると

いふのも妙である。これは「父」でも「戊」でもなく、「太」の圖象記號を標準にして中子の方向を決めるべしといふことで、出來上った中子上の陽文の圖象記號上にこの目印の線を入れた、とても解することができるとよいのである。然しこの銘文三字は尊の饗饗紋の右半の中央に位してゐるといふことで、特に左端の圖象記號の中心が中央に來てゐるわけではない。⁽⁴⁸⁾即ちこの圖象記號の中央の陽文の印については、すっきりした解釋が今のところつけ難いのである。

圖58のやうな例は「辛」と荷貝形の中心線が上下に揃つてをり、圖57などと違つて何も出來上った陽文の銘の上に目印の刻線を加へる必要は毛頭ない。これなどは(a)の方に解すべきものかも知れない。圖62の記號の、戈の援に加へられた垂直の線、圖63の同じ記號の戈の援および立つた人間形の頭から胴に及ぶ垂線についても圖58と同様なことが言へよう。然しこれらも實物について器表の狀況、(即ち中子の表面の狀況)を観察する機會をえてから判定を下した方がよいであらう。

圖59—61の例は、以上とは少々様子が違つてゐる。即ち銘文の溝の底の線ははっきりと上下に通つてゐず、薄れ氣味である。そしてよく見ると一方に偏つてゐる。圖59の圭の要素では、中央の劃の下端の突出部の左の縁の線の延長上にこれが出てをり、圖60の例では「𠂔」の要素の、旗杆と旗の裂が幟狀に垂下した部分との境界部にこれがあり、圖61の例では「辛」の中心の縱劃の左の縁の延長上にこれがあるのである。これらは、銘文の筆劃の一方の縁の延長上にある點、それにそれがかすれ氣味である點を考へ併せると、意識的に加へられたものではなく、中子用の母型に銘文を陰刻する際、筆劃の左右の縁沿ひに入れた刀の跡の境界部のさらへ残りと思ふべきと思はれる。といふことは、またこれらの銘が中子用の母型に陰刻されたからこそこのやうな線が残つたのであり、銘文を中子に陽刻したものではないことを物語るもの、といふことになる。

(3) 銘文の周圍の線で楔形突起のあるもの

圖33、64—69はいづれも短かい銘文で、銘文の部分だけ母型から陽文を採り、中子に嵌め込んだ際に出來たと思はれる粘土の境界の線ののこる例であるが、その線の形に特色がある。即ち矩形の一邊に鈍角の楔形のもの突出してゐるのである。こ

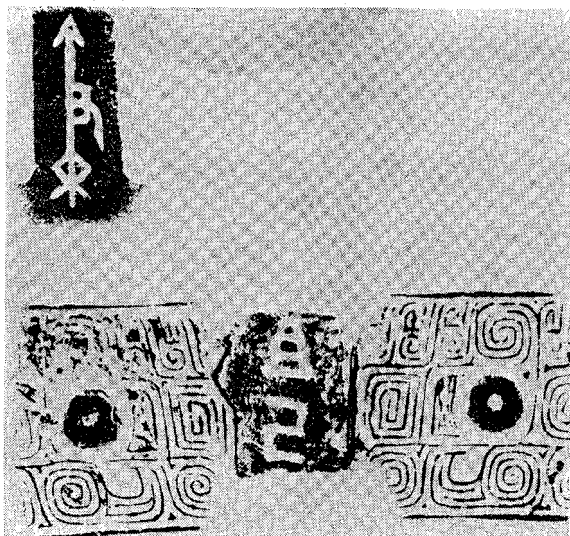


圖64 楔形突起のある銘文の周囲の線 1/1

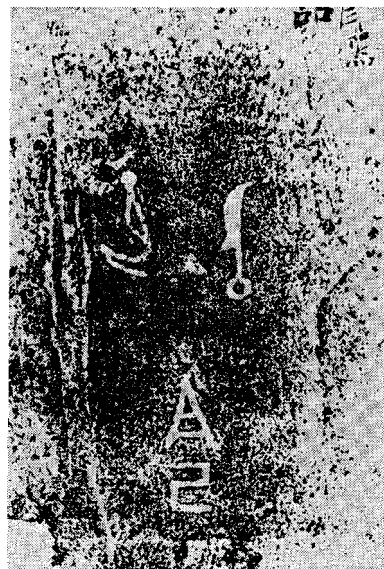


圖65 同 1/1

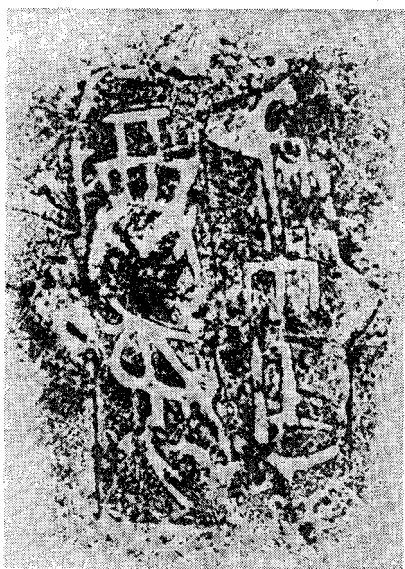


圖66 同 1/1



圖67 同 1/1



圖68 同 1/1



圖69 同 1/1

る。とはいへ、このような例で確かなものは、今のところこの他には知られない⁴⁹⁾。

圖64以外の例では、何も楔形の突出を設けなければならない必然性はない。圖65は銘の部分と、中子の他の部分との間に段差があり、確かに銘の部分が嵌め込まれたものと知られ、圖66も右方に銘の部分とその周囲とにレベルの違いがあるらしい。

圖67も拓本の様子からみて、銘の部分がかなり周囲より浮き上つてゐるやうである⁵⁰⁾。圖68、69では銘をとり圍む線は突出した不規則な線をなす。中子に銘の部分を嵌め込む際にできた隙間のあとらしい。

圖65—69は、このやうに銘文の部分だけを銘文用の母型から採つて中子に嵌め込んだことがほぼ確かと思はれる。これらは他に幾らでも例があるやうに、何も楔形の突起など作らず、たゞの長方形でも差支へなかったのに、わざわざこのやうなものを附けたといふことは、鑄型の合せ目には楔形の柄をつけるといふ慣習が、このやうな小さな粘土片の嵌め込みにも何といふこともなしに推し及ぼされた、といふことではないかと考へられる。さうとすれば、銘文の周囲を圍む粘土の合せ目と思はれる長方形線の一側にこのやうな突出が見出されるといふことは、銘文の部分が別に作られ、中子に嵌め込まれたものである蓋然性を、更に強くする事實と解することができると言へよう。

註
(1)

西周の例では羅一九三六、一、一七盧鍾。全體に鑄銘であるが第三行の盧の配偶者名の所が一度削りとられ、新たに鑿で「蔡姬」の名が刻されてゐる。また羅一九三六、一七、二〇—二三散氏盤。これも全體に鑄銘であるが、第一行「即」の「p」の上部、第一五行「爽」の「大」の中央及び下部の劃が、いづれも鑄上つた時に出て

殷周青銅器銘文鑄造法に關する若干の問題

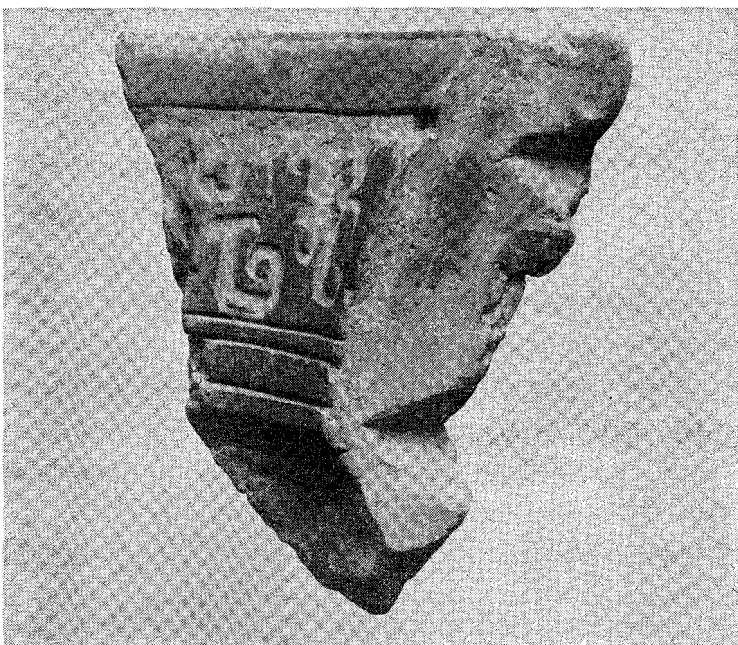
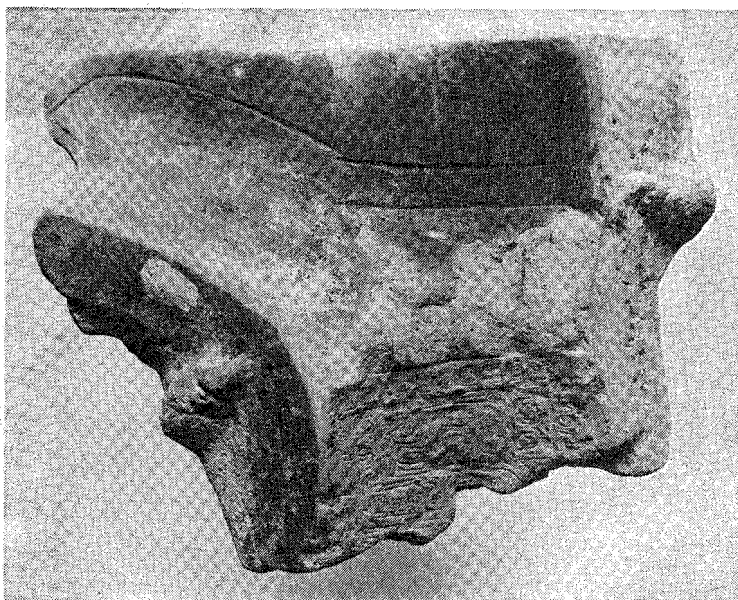


圖70 鑄型の三角錐狀の柄と柄穴

ゐなかつたので鑿で彫り足されてゐる。いづれも實物を檢分して確認したものである。

春秋前期の例では滕縣文化館、萬樹齋、楊孝義一九七八、圖八、九、薛子仲安簠及び走馬薛仲赤簠。夫々一七字、及び一五字の銘の全文が鑿で刻まれてゐる。從來この時代の例は知られなかつたのであるが、手なれた彫りぶりからみて、例外的に鑿彫りが行はれたと

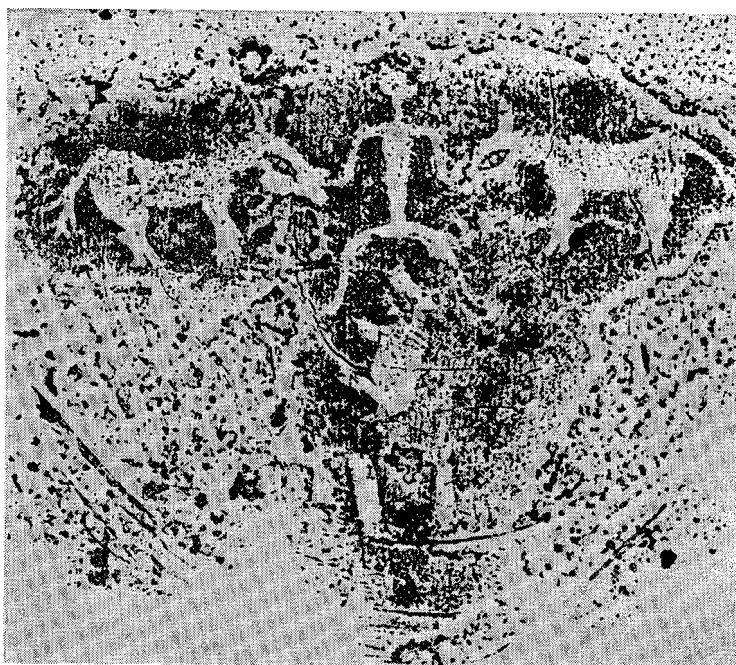


圖71 銘文の中子に馬の目を陰刻した例 1/1

は考へ難い。この時代から一部で銘文を鑿彫りする風が行はれ始めたことが知られる。

- (2) 『淮南子』本經訓に「大鐘美重器、華蟲疏鏤、以相繆紵、寢兕伏虎、蟠龍連組、焜昱錯眩、照耀輝煌」と。
- (3) 石璋如一九五五、一〇四—一二二頁
- (4) 融けた金屬を流し込んで器物を成形する場合、器物の外側に當る所を圍ふのが「鑄型」、出来上った器物の内部の中空になるべき部分

- (5) につめておくのが「中子」である。
- (6) 石璋如一九五五、一二二頁
- (7) Bernard 1961, p. 160, fig. 51.
- (8) ibid. pp. 150-160
- (9) 石璋如一九五五、一〇六—七頁
- (10) 今日の鑄物には木型、金型、石膏型、合成樹脂型などが使はれる。
- (10 a) 容庚一九四一、上、一五八所引より引く。
- (11) 張光遠一九七八、六三頁
- (12) 郭沫若一九五七、圖一五一—四
- (12 a) 羅一九三六、一二、二五。實物の檢物によつて確かめた。
- (13) 張光遠氏は最近の論文で陳侯午墓の銘文の部分のイレギュラーな高低の觀察に基づき、この銘が中子にスタンプで捺して作られたものであることをみごとに證明してゐる(張光遠一九七八、六三—六九頁)
- (14) Bernard 1976, pp. 68-9
- (15) Bernard 1974, p. 49
- (16) 張光遠一九七二、五三頁
- (17) バーナードはこれを master block と呼ぶ。
- (18) 野ではないが、銘文を書く際の當りの線が蓋では僅かに残り、器では磨かれた結果消失したと思はれる例のあることは圖72、注(33)に引く通りである。
- (19) Bernard 1976, pp. 70, 73-6
- (20) ibid. fig. 19-47 參照
- (21) この印の形、及び銘の右上と左下にはこの印が存在しないことについて Freer Gallery of Art の Assistant Curator, Thomas Lawton 氏に確認していただいた。記して感謝の意を表したい。
- (22) 上海博物館一九六四、附冊、五六頁
- (23) Bernard 1976, p. 79
- (24) ibid. fig. 42a
- (25) ibid.

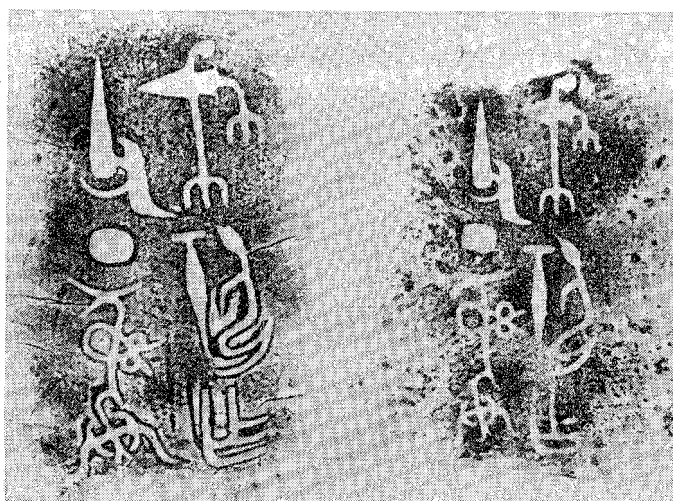


圖72 蓋銘のみに陽文輪廓線，當りの線の残る例 1/1

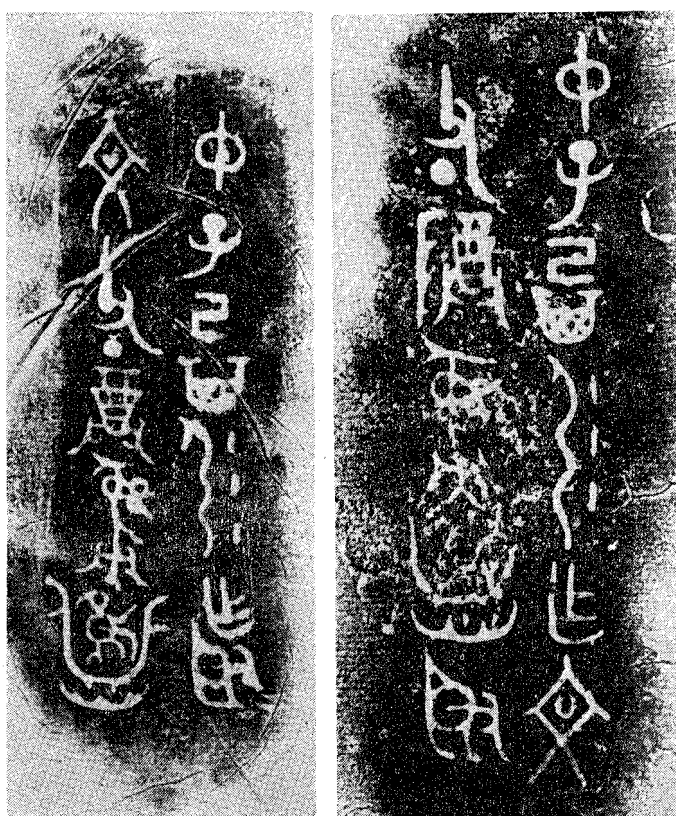


圖73 同 1/1

- (25) ibid. p. 52, fig. 3
 (26) Gettens 1969, fig. 147
 (27) Barnard 1976, n. 9
 (28) かういふ突出した線は鑄造後の仕上げに際して磨り消されてしまったため、明器である鉛器とかこの鑄造しの例以外には通常見ることができないのである。
 (29) パーナード氏のいふのとは別に、確かに出来上つた中子上の銘文の一部分に更に刻することも行はれてゐる。然しそれは例へば圖71の馬の目のやうな例である。拓本で白く出てゐる馬の頭に目が黒く出

- てゐるが、これが鑄込む前にここに白く出てゐる部分に當る中子の突出した部分に突つた道具で引掻いて刻されたものであつて、この中子を作るもとなつた母型に細く凸で彫り残すといふやうな面倒な手續きで作られたものでないことは明かだからである。
 (30) 松丸道雄氏は何らかの理由で未使用に終つたといふこともあり得るといふ。
 (31) Barnard 1976, n. 13
 (32) 上海博物館一九六四、附冊四頁
 (33) 現在觀察の對象となるのは、かういつた容器の中で磨かれることの



圖74 陽文輪廓線がわずかに影り残された例 3/2

- ない部分につけられた銘文が主であるが、器の内壁のやうな磨かれる部分につけられた銘でも蓋銘に龍字が残つて器銘にはその痕跡を留めない例や(圖72 73)、かすかにその跡ののこる例(圖74)もあり、現在その跡の認められないものの中にも、その類があつたに相違ないのである。
- (34) 林一九六八、一〇一—一二頁
- (35) 郭沫若一九五七、圖一一三—又一二五
- (36) 陝西省博物館、陝西省文物管理委員會一九六三、中國科學院考古研究所一九六五
- (37) 前引の西周後期の例ばかりでなく、例へば金方彝(郭一九五七、圖二—三)の蓋銘(「公」字の形をみよ) 鬲卣(同、五)の蓋銘(「又」字の形をみよ) 小臣謎簋一、二(同、九—一二)の蓋銘(「目」字の形をみよ)等、西周前期からこのことは認められる。
- (38) 銘文ではなく、器の紋様であるが、同一の器の紋様を四人で描き、

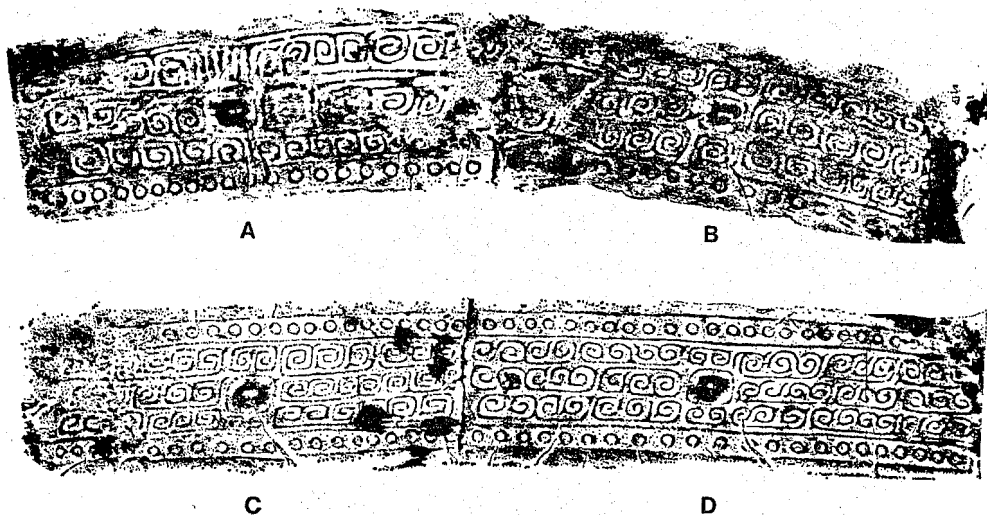


圖75 A~Dの四つの部分を四人で分けて刻した紋様

恐らくまた彫つたことの知られる例がある。圖75である。甕の頸と腹の、組合せて作られた各々二個づつの鑄型が、A B C D同紋でありながら紋様を構成する渦紋の構造、線の性質に相違があり、従つて別の人によつて作られてゐることが看取されよう。青銅器の紋様の作り手についても、ここに證したとき銘文の書き手についてと同様の事實があつたことが知られる。このやうな事象がどの程度廣くあつたことなのか、或ひはこれが稀な例外であるのかについては、後の研究に俟ちたい。

- (39) Barnard 1976, pp. 46-9
- (40) *ibid.* p. 47
- (41) くはしくは氏の研究論文の發表にまつ。
- (42) 粘土の鑄型に陽文に紋様を彫りのこした例としては圖31參照。
- (43) 松丸一九七七、六八頁
- (44) 山西省文物管理委员会一九七六、六八——六九頁
- (45) 增淵龍夫一九六〇、四三〇頁
- (46) Karbeck 1935, pp. II, 7, III, 4, VII, 2
- (47) なほ、このやうに文字の筆劃の一部がきれいに脱れたについては、張光遠氏が考へた方法のやうに、中子に文字の厚さだけの粘土を貼りつけ、そこに裏字陽文の銘を彫り残したとすると、中子とこの貼りつけた粘土がよくなじんでいなかったのきれいに脱れたのだ、とうまく説明ができさうに思はれる。然し圖30bの中子の地膚の觀察からはその方法が採られたとは考へ難いこと、二二頁に記した通りである。
- (48) この器を所藏するチューリヒのムゼウム・リートベルクのヘルムート・ブリンカー氏に問ひ合せた所による。
- (49) 他に羅振玉一九三六、六、一〇の簠の兩耳の下銘(于省吾一九四〇、上一九)にも、右邊に同様な楔形の突出とも見えるものがあるが、これは或ひは鈎連雷紋の一部がさう見えるだけかも知れないので引かない。

殷周青銅器銘文鑄造法に關する若干の問題

(50) 羅振玉一九三六、一四、三三、一一の罍も同様な例である。

挿圖出所目錄

- 圖1 爵。京都大學人文科學研究所考古資料ファイル(以下「人文研考古資料」と略稱)
- 圖2 尊。京大人文研考古資料
- 圖3 Barnard 1961, fig. 51
- 圖4 簠。天理參考館藏(京大人文研考古資料)
- 圖5 觚。京大人文研考古資料
- 圖6 卣。Museum Rietberg, Zürich 藏(京大人文研考古資料)
- 圖7 尊。臺北、故宮博物院藏(松丸道雄氏拓)
- 圖8 壺。British Museum 藏。同博物館寫真
- 圖9 鼎。京大人文研考古資料
- 圖10 鼎。黒川古文化研究所藏(羅振玉一九三六、四、二八)
- 圖11 方彝。Freer Gallery of Art, Washington 藏(京大人文研考古資料)
- 圖12 同右
- 圖13 方彝。上海博物館一九六四、附、五六頁
- 圖14 鼎。京大人文研考古資料(松丸道雄氏撮)
- 圖15 黒川古文化研究所藏。林實測
- 圖16 同右
- 圖17 林原圖より森茂氏仕上
- 圖18 觚。Museum of Decorative Art, Copenhagen 藏(京大人文研考古資料)
- 圖19 壺。陝西省博物館等一九六三、四
- 圖20 角。Museo Nazionale d'Arte Orientale, Roma 藏(京大人文研考古資料)
- 圖21 尊。皇屋博古館藏(京大人文研考古資料)
- 圖22 尊。京大人文研考古資料

- 圖 23 觚。京大人文研考古資料
- 圖 24 尊。泉屋博古館藏(京大人文研考古資料)
- 圖 25 尊。The Cleveland Museum of Art, Gift from Howard Holis
- 圖 26 觚。京大人文研考古資料
- 圖 27 瓶。天理參考館藏(樋口隆康氏撮)
- 圖 28 觚。Bernard 1976, Fig. 3
- 圖 29 京大人文研考古資料
- 圖 30 京大人文研考古資料
- 圖 31 陶範。京大人文研藏。林撮
- 圖 32 同右
- 圖 33 觚。羅振玉一九三六、一四、二七
- 圖 34 爵。王辰一、九三五、下、三一
- 圖 35 罍。同右、下、六五
- 圖 36 爵。京大人文研考古資料。寫真。樋口隆康氏撮
- 圖 37 尊。上海博物館一九六四、附、四頁
- 圖 38 觚。于省吾一九五七、三七〇
- 圖 39 觚。Honolulu Academy of Arts, Honolulu (京大人文研考古資料。寫真。樋口隆康氏撮)
- 圖 40 尊。王辰一九三五、上、六一
- 圖 41 尊。羅振玉一九三六、一一、二九
- 圖 42 尊。Museum of Fine Arts, Boston
- 圖 43 觚。王辰一九三五、下、四〇
- 圖 44 簋。中國科學院考古研究所一九六五、圖版一八
- 圖 45 同右、圖版一九、1
- 圖 46 同右、圖版一九、2
- 圖 47 卣。羅振玉一九三六、一二、四一
- 圖 48 方彝。京大人文研考古資料
- 圖 49 瓶。羅振玉一九三六、一八、一九
- 圖 50 簋。中國科學院考古研究所一九六五、圖版一五

- 圖 51 彝。羅振玉一九三六、六、一一
- 圖 52 卣。Fogg Art Museum, Harvard University (京大人文研考古資料)
- 圖 53 卣。Asian Art Museum of San Francisco, The Avery Brundage Collection
- 圖 54 簋。劉體智一九三五、八、七二
- 圖 55 簋。中國科學院考古研究所一九六五、圖版八
- 圖 56 尊。Museum Rietberg, Zürich (京大人文研考古資料)
- 圖 57 同右
- 圖 58 簋。殷紹嘉一九六三、圖二、5
- 圖 59 尊。同右、圖二、6
- 圖 60 卣。Museum of Far Eastern Antiquities, Stockholm (京大人文研考古資料)
- 圖 61 鼎。白鶴美術館藏(京大人文研考古資料)
- 圖 62 尊。White 1956, Graph Chart 2-4
- 圖 63 罍。同右、Graph Chart 2-1
- 圖 64 爵。羅振玉一九三六、一六、二
- 圖 65 卣。劉體智一九三五、四、二七
- 圖 66 尊。羅振玉一九三六、一一、一八
- 圖 67 觚。王辰一九三五、下、六一
- 圖 68 卣。羅振玉一九三六、一三、二二
- 圖 69 卣。劉體智一三三五、四、二四
- 圖 70 陶範。京大人文科學研究所藏(林撮)
- 圖 71 尊。于省吾一九五七、二二一
- 圖 72 卣。泉屋博古館藏(京大人文研考古資料)
- 圖 73 卣。京大人文研考古資料
- 圖 74 方彝。白鶴美術館藏(京大人文研考古資料)
- 圖 75 江西省博物館等一九七七、圖七、八

引用文獻目錄

日本文、中國文

殷紹嘉 一九六三、「介紹陝西省博物館的幾件青銅器」、《文物》一九六三、三、四三一—五

于省吾 一九四〇、《雙劍謠古器物圖錄》、北平

〃 〃 一九五七、《商周金文錄遺》、北京

王辰 一九三五、《續殷文存》、北平

郭沫若 一九五七、《兩周金文辭大系圖錄考釋》、北京

江西省博物館、清江縣博物館 一九七七、「近年江西出土的商代青銅器」、《文物》一九七七、九、五八一—六二三

山西省文物工作委員會 一九七六、《侯馬盟書》、北京

上海博物館 一九六四、《上海博物館藏青銅器》、上海

石璋如 一九五五、「殷代的鑄銅工藝」、『中央研究院歷史語言研究所集刊』二六、九五—一二九

陝西省博物館、陝西省文物管理委員會 一九六三、《扶風齊家村青銅器群》、北京

中國科學院考古研究所 一九六五、《長安張家坡西周銅器群》、北京

張光遠 一九七二、「西周重器毛公鼎——駁論漢洲巴納博士誣偽之說」、《故宮季刊》七、一二、一一六—九頁

〃 〃 一九七八、「戰國初齊桓公諸器續考」、《故宮季刊》一二、一一、五九—八〇頁

林巳奈夫 一九六八、「殷周時代の圖象記號」、《東方學報》、京都三九冊、一一—一七頁

增淵龍夫 『中國古代の社會と國家』一九六〇、東京

松丸道雄 一九七七、「西周青銅器製作の背景」、《東洋文化研究所紀要》第七二冊、一一—二八頁

容庚 一九四一、《商周彝器通考》、北平

羅振玉 一九三六、《三代吉金文存》

劉體智 一九三五、《小校經閣金文拓本》

歐文

Barnard, N., 1961, *Bronze Casting and Bronze Alloys in Ancient China*, Monumenta Serica Monograph XIV, Tokyo

〃 〃 1974, *Mao Kung Ting, A Major Western Chou Period Bronze Vessel. A Rebuttal of a Rebuttal and Further Evidence of the Questionable Aspects of its Antiquity*, Canberra

〃 〃 1976, *The Casting of Inscriptions in Chinese Bronzes with Particular Reference to those with Rilievo Guide-lines*, 『東吳大學中國藝術史集刊』六、四三—一三四頁

Gettens, R. J., 1969, *The Freer Chinese Bronzes*, Vol. II, *Technical Studies*, Washington

Karlbeck, O., 1953, *Anyang Molds, Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, no. 7, pp. 39-60

White, W. C., 1956, *Bronze Culture of Ancient China*, Toronto

殷西周間の青銅容器編年

林
巳
奈
夫



○この圖は殷の終り頃から西周中期までの青銅器の若干器種をとりあげて器形を型式學的に排列したものである。
くはしい説明は本文第三章にある。

○器の型式の先後を考察するに當つては、器の側視形を第一級の重要性をもつ標準としてとり上げ、銘文は勿論、紋様も考慮の對象から外した。

○a b c d及び西周中期の各段はこの順に年代の降る、各器種に通ずる形式變遷の各時期を示す。それに割当てられる絶對年代については第三章(二)節論ぜられるが、bとcの間に殷周の交替が来る、といふのが結論である。

鼎 ④

外にふん張り気味の足、少し外に反った耳、全體的どっしりしたプロポーションは鼎③(2)ほかb欄の鼎に共通してゐる。(1)(2)は(3)(4)に比べて耳が小ぶりで、その點鼎③(2)と共通する。



(1)



(2)



(3)



(4)

鼎 ③

(1)は安陽大司空村53號墓の土器。(2)は對應する形の青銅器。耳、足、器側のふくらみ、全體のプロポーション等の特徴は、鼎①②の、b欄に該當する。



(1)



(2)

鼎 ②

鼎①の各欄に對應する特徴をもった器がここにも見出される。



(1)



(2)



(3)



(5)



(4)



(5)



(6)



(7)



(8)

鼎 ①

(1)(2)は西周中期の例で、側視形は全體に平たく、器側の線は直線的である。(4)は安陽關廟出土の器で、器腹の圓みのある線に特徴がある。鼎④には容器の部分全體にコロッと圓い形から、次第に器側の曲線が直線的になり、底も平らに近くなり、器の最大径の位置が下に降ってゆくといふ變化がたどられる。(1)は大司空第三期の例、耳は控えめのものから、大きな外反りの威張ったものへと發達する。足もb、cあたりでは太くなるが、d、西周中期にはみすぼらしい形に變る。



(1)参考



(2)



(3)



(4)



(6)



(7)



(8)



(9)



(10)



(11)



(12)

西周中期

鬲 鼎 ②

(1)はどっしりしたプロポーションが鬲鼎①のb欄に、(2)は器腹の側視形、細い足が鬲鼎①②のc欄に、(4)は足の細長い點が方鼎のd欄に夫々共通する。



(1)



(1)



(2)



(3)



(4)



(3)



(2)



(4)



(5)



(6)



(7)

鬲 鼎 ①

(1)(2)は堂々としたプロポーションにおいて鼎④のb欄に對應し、(3)(4)は器側のふくらみ方、全體の程よい鈎衡において鼎③(2)に對應する。(5)(6)は直線に近くなった器側の線で鼎①のc欄の器に對應する。(7)は内股氣味の長い足、浅い容器の點で鼎①②及び方鼎の西周中期の器に對應する。

方 鼎

左の列には乳紋のあるものを、右の列には器腹に大きく饕餮を高凸の技法でつけたものを並べた。(3)(4)は大きな耳、太い足、厚く高い體、どっしりしたプロポーションの點で鼎④のb欄に對應する。以下足が次第に細長くなり、容器の深さが減じてゆく點、鼎①②と對應した變遷が認められる。



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)



(7)



(8)



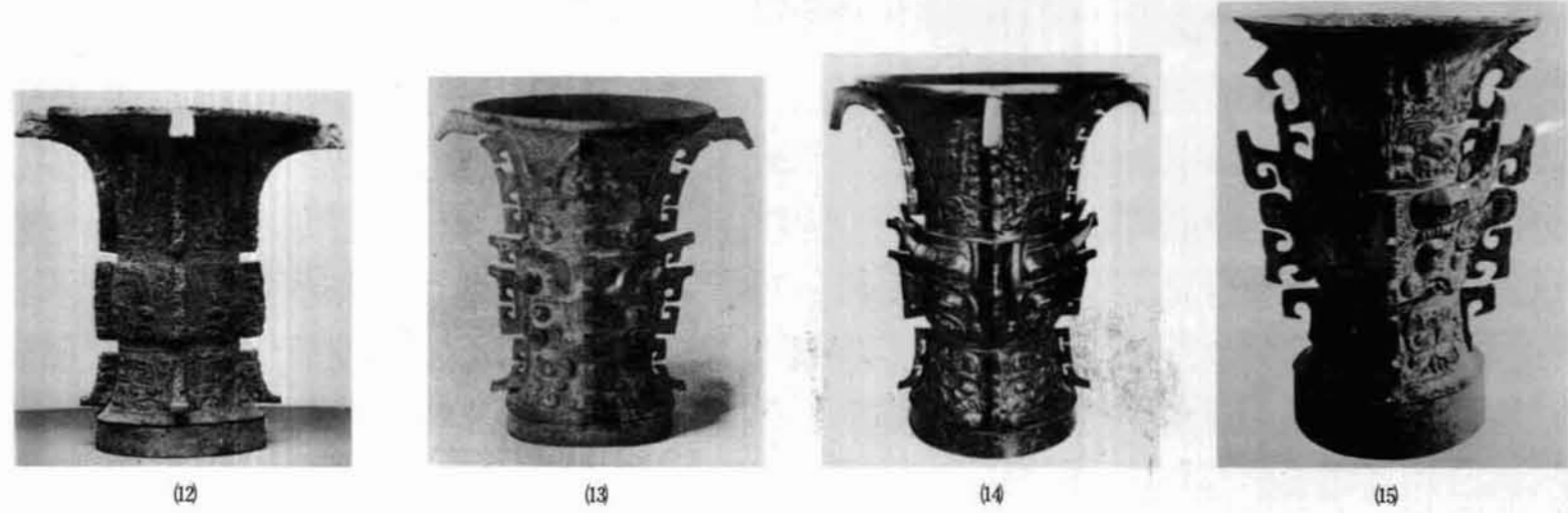
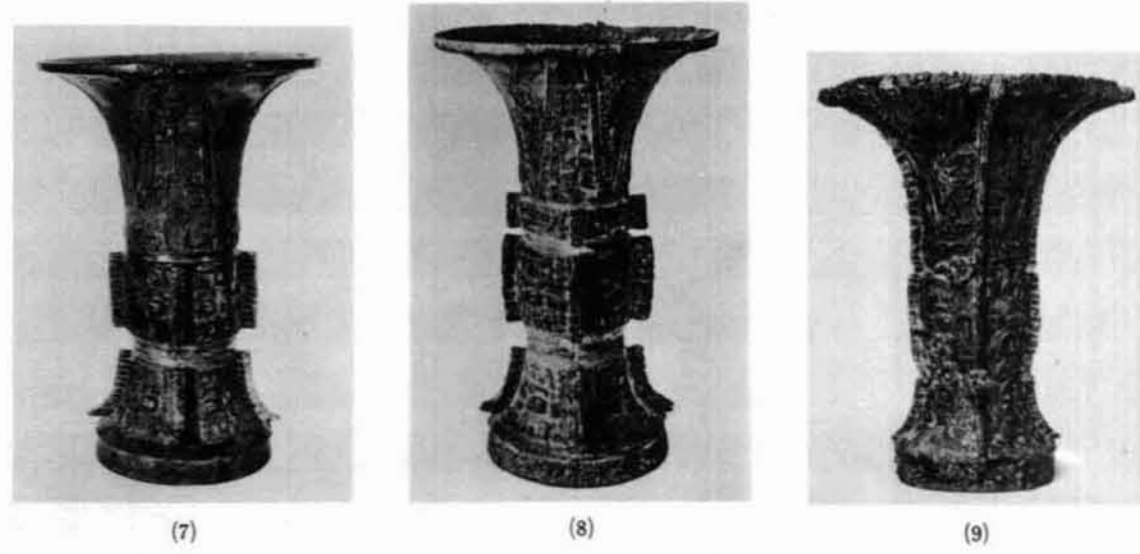
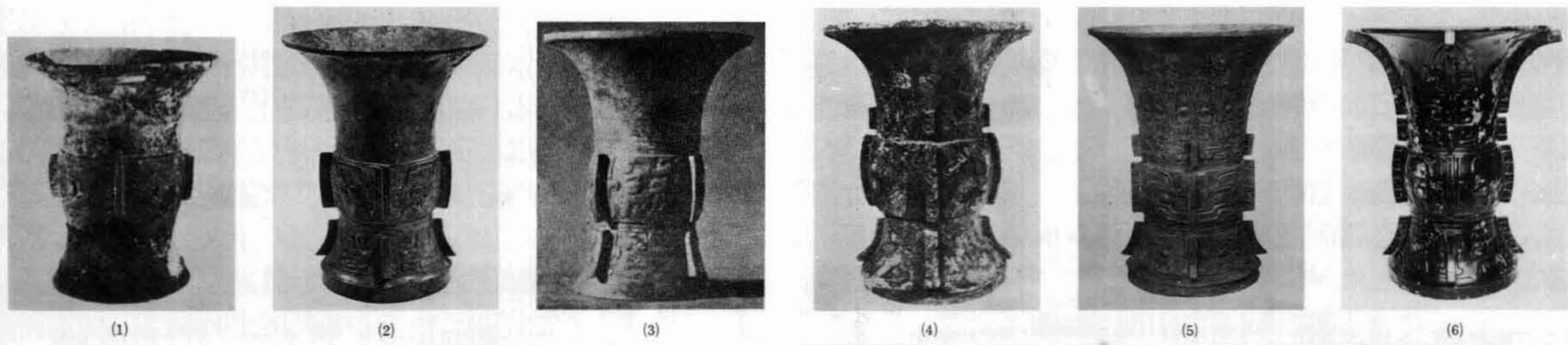
(9)



(10)

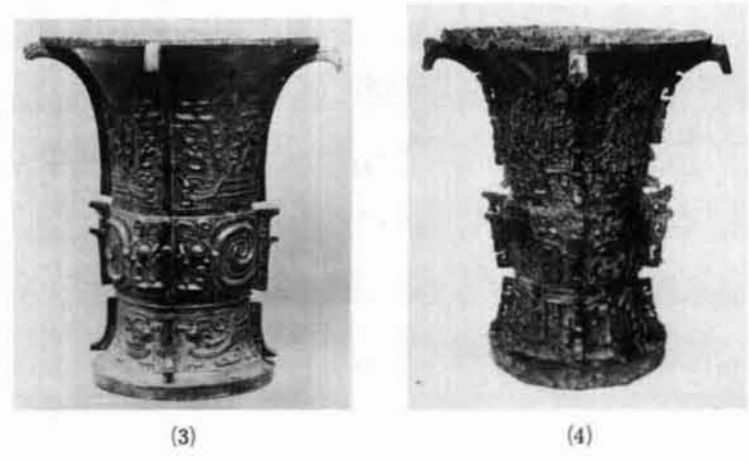
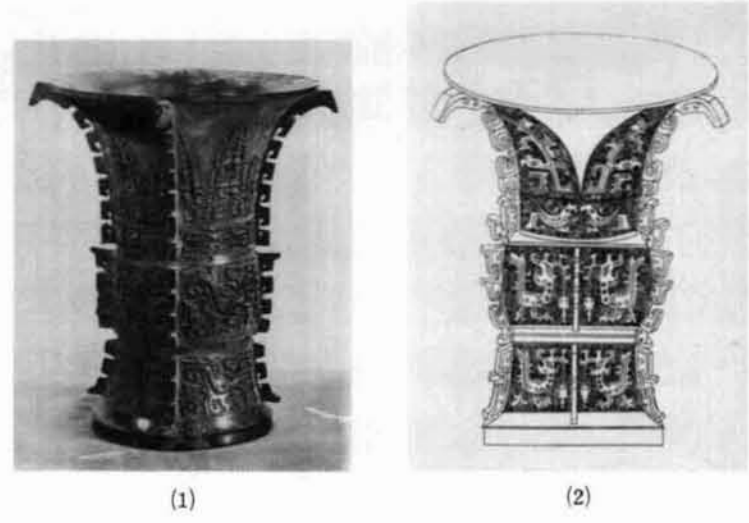
尊 ①

① 欄に分類したのは、顔をむしってみると口頸部も足も折れ目のない張りつめた曲線を畫いて外に張り、全體に安定した堂々たる姿を示すもの。この器形の特徴、及び高く厚い體でこの威張った姿が強調されてある點が④に共通するので①欄に入れてある。②では顔の上部の水平外方への突出が強調され、その移行部に折れ目が生じてゐる。足の顔の突起の出方にも特徴的なしやくれがあり、突起の先端は割著の頭のやうな形になつてゐる。これは④のc段階に特徴的なものである。③④⑤は②へ移行する中間形。c、d欄にはまた①欄の器から尊③に示したやうな西周中期の形に到る中間形を示す。③—⑤は②に見るやうな、外方への突出の指向が更に強調された例。器各部のプロポーションはおろそかにされてゐる。④—⑤は全體に幅の割に丈が低く、ずんぐりして足の最下部が強く張り出し、尊③の西周中期の形に近づいた類。⑥⑦は③④と同銘の方彝。尊と同じ特徴がここにも認められる。



尊 ②

顔をついた瓶形尊で①以外の紋様をもつもの若干。(5)―(7)は西周中期の證をもつもの。著るしく丈が低く、尊①b欄にみたやうな顔から腹、足へのリズムカルな曲線の運動は全く失はれてゐる。c、d欄はこの西周中期の形に到達する以前の中間的な形態をもつもの。



尊 ④

側視形の特徴が尊③と平行関係をもったものを d, c 各欄にふり分けてある。



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)



(7)



(8)



(9)



(10)



(11)



(12)



(13)



(14)

尊 ③

(2)―(6)に示した器は、尊①のb欄の器から釐をむしりとった時に出現する側視形をもつ。c, d, 西周中期の欄には、尊①②からの類推で、この類も次第にずんぐりした形に変わってゆくものと想定し、それら各期に夫々該当する形態をもつものを拾った。



(1)参考

a

b

c

d

西周中期

尊 ⑥

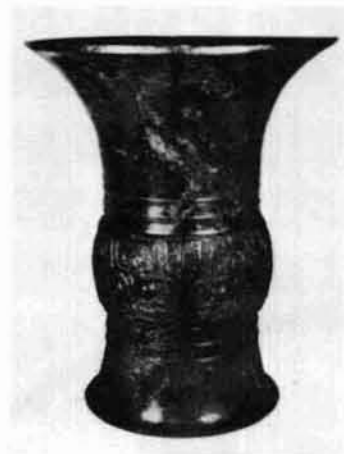
側視形の特徴からb欄に入る。これと同一技法の紋様をもった(3)の角と共に年代考察の重要な鍵になる。



(1)a



(1)b



(2)



(3)a



(3)b

尊 ⑤

論證に必要な参考資料が引いてある。紋様は様々である。



(1)



(2)



(3)

a

b

c

d

西周中期

卣 ⑦

引用した他の器種と銘乃至紋様の点でつながりのあるものが拾っている。



(1)



(2)

ASIAN ART MUSEUM OF SAN FRANCISCO
The Avery Brundage Collection



(3)



(4)

卣 ②

(1)―(3)とも蓋が浅いめで甲も低い點、器側の畫く曲線、足の形などが卣①のb欄と全く合致してゐるのでb欄に入れてある。



(1)



(2)



(3)

卣 ①

b欄に配したのは、蓋は浅く、その上面のふくらみも低く、足も低くてかなり急な角度で外に擴がる類。(7)の器の腹のふくらみは卣①b欄の(4)の鼎と極めて近く、また兩者が同坑から出土してゐる所から、この類をb欄に配した。a欄の(3)(4)は西周第三期に當る(1)(2)器と、b欄の器との中間形と見られるのでここに入れてある。卣①の類で西周中期のものは容器の部分の丈が横幅に比して著しく低い。この形は鼎①の同期の鼎にも認められる。鼎と卣は器腹の形の變遷に平行關係がある所から、c、d欄の卣も鼎の器腹の變化になぞらへて選んである。卣ではまた蓋の身と重なる部分が深くなり、甲高の度合が増してゆく。



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)



(7)



(8)



(9)



(10)



(11)



(12)



(13)



(14)

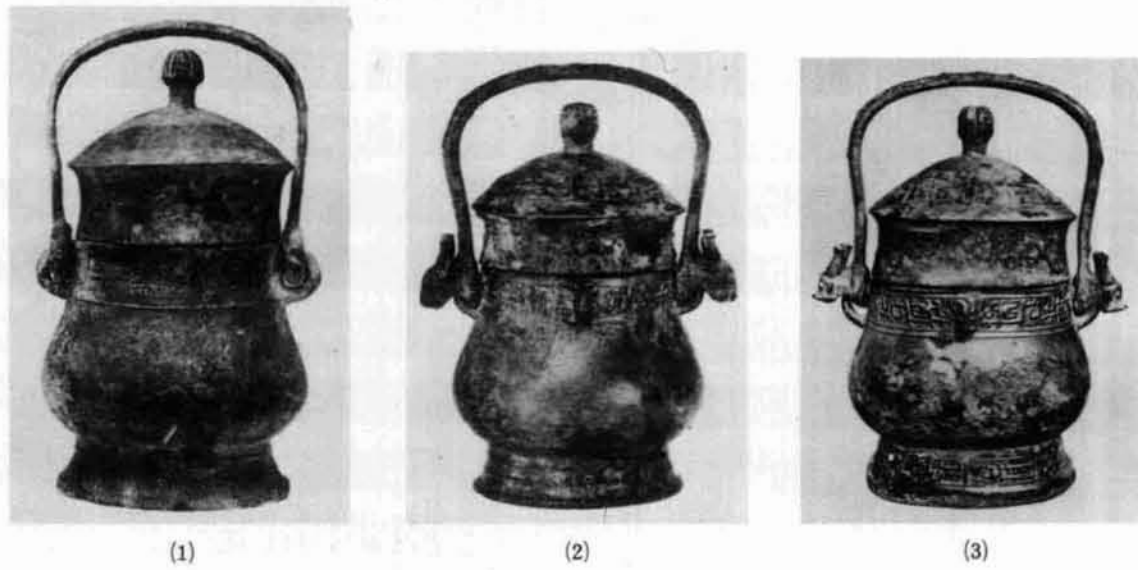
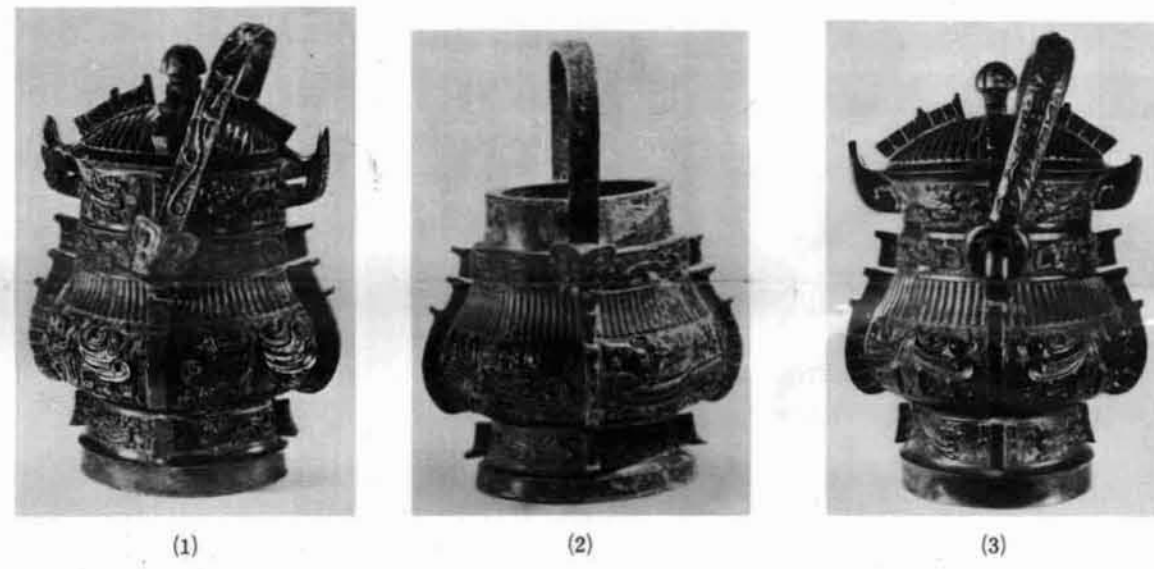
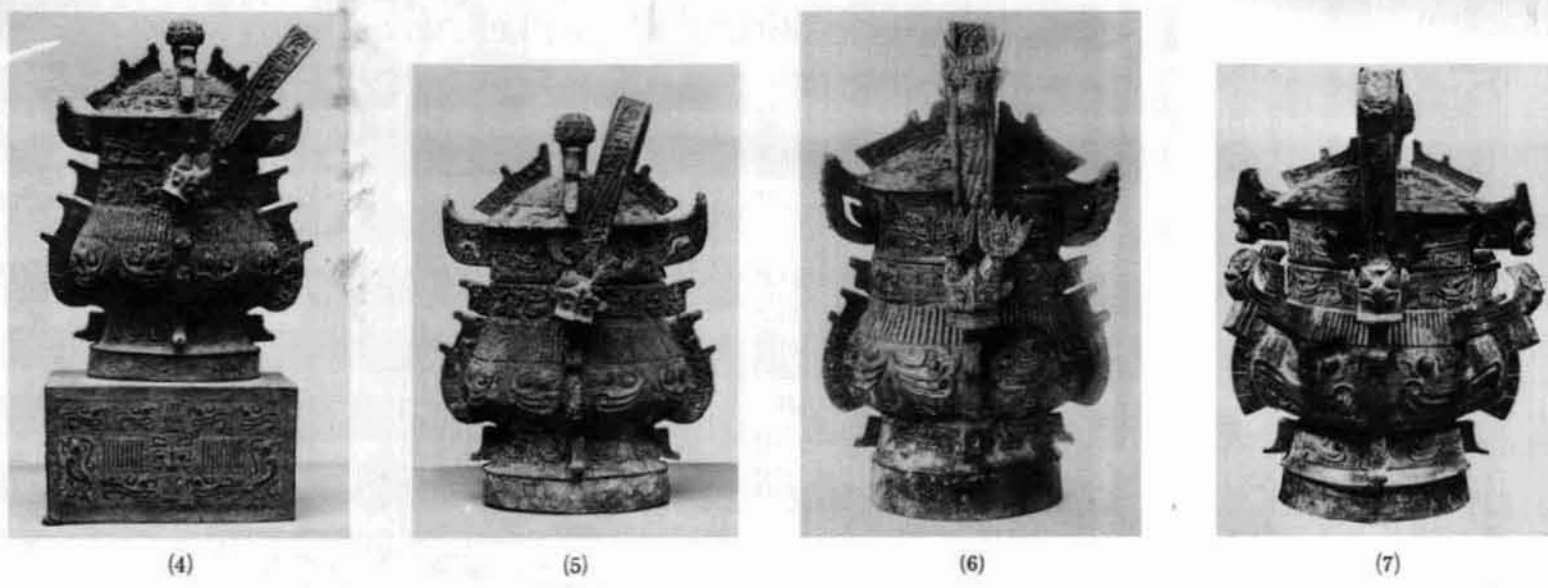


(15)

西周中期

卣 ④

④—(7)は割箸の頭状の突起のついた大げさな鬲において卣③(5)、(7)と共通し、足の下部に高い圓筒状の臺がつく點は尊①③④⑤と同様であり、蓋の嘴状の突起が巨大化してゐる點もこの尊の裝飾の外方突出への指向と合致する。これらの點からこれをc欄に納めた。(1)―(3)は蓋の嘴状突起や鬲が巨大な點で(4)―(7)に通ずるが、蓋はそれほど甲高ではなく、鬲の突起をみると卣③b欄の器と卣④(4)―(7)の中間形である。そこでこれらはb,c欄の中間に配した。

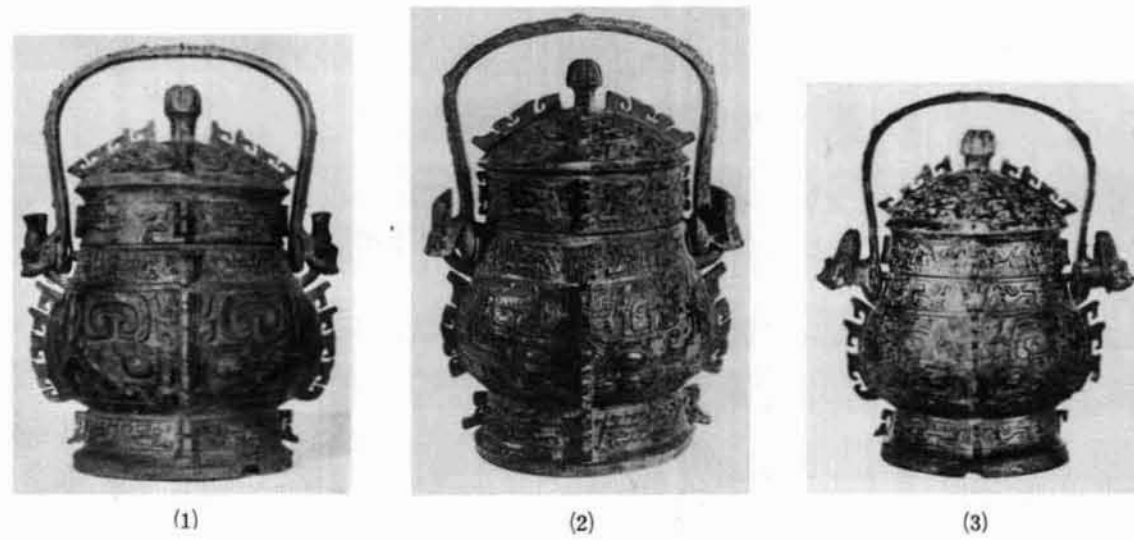


卣 ⑥

卣⑥から鬲をとり除くと卣⑥が出現する。深く甲高な蓋は卣③c欄のものに極めて近い。

卣 ⑤

紋様は卣③と同様だが、全體に丈が高い類、鬲の形は卣③(8)と全く同様な所からd欄に入れてある。深く、甲高な蓋がこの期に作られたことを示す。



卣 ③

(3)(4)の器から鬲をとり拂ってみると、卣③b欄の器と同じシルエットが出現する(もっとも足の型式には相違がある)。更に、これらの器の鬲の型式は卣④、尊①のb欄のものと共通するのでここに配した。(2)は提梁の附き方が異なり、腹の張りが(3)(4)より強いが、鬲の形がこれと共通するのでここに入れた。(1)は(2)に近いが、足の開き出しの度合が卣④(3)(4)に近く、鬲も控え目である所からa欄に内れた。(5)、(7)、(8)は卣に認められた器の高さの變遷からの類推でここに入れてある。(7)の水牛の角を器から高く浮き立たせた技法は尊④のc欄の器にも見出される。(6)の同技法の鬲をつけた卣は年代考證の參考として引いてある。また(8)の透し彫の羽根状の鬲は尊④d欄の器にもあったものである。



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)



(7)



(8)

簋 ②

各圖の器とも、その側視形の特徴が簋①と極めて明瞭な對應關係にある。(5)の足の側には由⑤(1)(2)と同様な羽根狀の飾が、(6)の足には由④(6)の足にみるのと同様な、突起のついた飾が見られる。(5)(6)の鑿の上に立體的な大きな角をもった動物頭があるが、尊①や由③④のc圖の器に認められた大げさな繁雜な立體的な裝飾の愛好と對應するものである。



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)



(7)



(8)



(9)



(10)



(11)

簋 ①

(1)は前にも引いた(鼎④尊①由①)安陽大司空村53號墓出土の土器。そっくり同じ形の青銅器はないが、器側の曲線、足の開き出しの具合が近似するものに(2)がある。この器の腹のふくらみ具合は鼎③(4)と全く同様である。そこでこれをb圖に配した。以下c,d圖の蓋も、器側の線が直線的になり、最大径の部位が下り、全體に淺くなってゆく點、鼎①と對應した變化をたどる。(9)はそれほど淺くはないが、頸から腹へのしやくれ方は(7)の同様な特徴が更に強調されたもの。足の下の板狀の張り出しも(7)より更に極端になってゐる。



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)



(7)



(8)



(9)

簋 ④

紋様、銘文において、引用した他の器種と關聯のあるものが寄せてある。



(3)



(4)



(5)



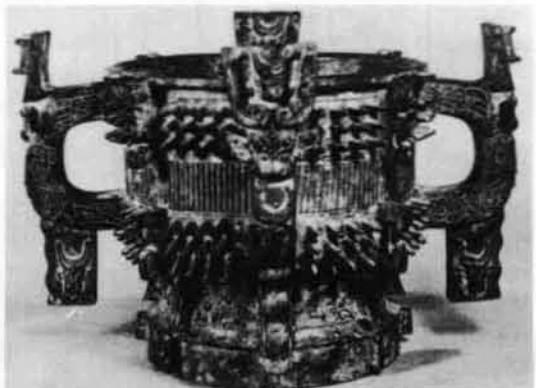
(1)



(6)



(2)



(7)



(8)



(9)



(10)

簋 ③

器の側視形の特徴に簋①との對應が認められよう。(2)は器腹のふくらみから見るとb欄に入りたい所であるが、壺上の大げさな耳の立った動物頭、圓筒状の高い臺のついた足はc欄の器にみる所である。そこでb、cの中間の位置に配した。



(1)

From The Arthur M. Sackler Collection



(2)



(3)



(4)



(5)